

## 「代わって夢見るために」

御影福音教会 森 英樹



あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。

マタイ18・12

今年二月、御影では二〇一二年度のビジョンセミナーに「声なき者の友」の輪」の代表、神田英輔先生をお招きした。

そこで語られた言葉が今なお心に響いている。

「なぜ世界は砂漠と化したのか」…長年、日本国際飢餓対策機構総主事として約七十九国で飢餓や貧困に苦しむ人々の自助努力を支援する活動に従事してきた師の問いかけだ。その答えは、「人は本来、人を愛し物を利用すべき存在なのに、物を愛し人を利用するようになった。その結果、世界から森が消え、砂漠となった」である。何も自然だけではない、これは私たちの「心の砂漠化」についても、実に巧みに言い当てている。

さらに、台湾のストリートチルドレンのお話も聞かせて頂いた。親が育児放棄した子どもたちは、最初は友達の家を転々とし、やがて路上で生活するしかなくなる。しかし台湾では、そんな彼らに唯一働きかける団体がある。そのメンバーは彼らのところに行き、「大丈夫か、食べるものはあるか」と話しかけ、自分の所に連れて来て、彼らに家族と住む家と食べ物と教育を与える…その教育とは「ものを盗む、人を殺す、麻薬を売る」こと、…その団体の名前は「マフィア」。

六年前、会堂いっぱいに子どもたちが満ちていた御影の教会学校。小学校の前では特別イベントの度にごとにチラシをまき、プレゼントや出し物を用意し、来てくれるお友達の数が多ければ、そのイベントの成功を喜んでいた。しかし今、御影の教会学校のお友達はまばら。案内しても以前のようにお友達が来ることはない。そして、最近考えさせられている…「会堂にお友達をたくさん集めたからといってどれだけの意味があるのか」と。

全く見えない…まさに暗中模索。しかし月に一度、土曜日に、有志CS教師でプレーヤーウォークを始めた。自分で自分の将来の夢を描くことのできないお友達のために、また、彼らが見るべき夢に、教会が気づくために。今、主は私たち教会が会堂から出て行くことを願っていると思う。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「みことばが語りかける説教」(前半)	3
キリストの教え②	13
旧約⑥「モーセ」	19
キリストのみわざ	49
旧約⑦「ヨシュアと士師たち」	85
カリキュラム	97
おわりに	98

### 〔凡例〕

1、原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。

2、礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
 「ホーリネス・」 「ホ・」 ……日本ホーリネス教会  
 「インマヌエル・」 「イン・」 ……インマヌエル教会学校部  
 「日キ・」 ……日本キリスト教団出版局

# 「みことばが語りかける説教」

～教会学校説教への備えのために～（前半）

西大和キリスト教会 宮澤清志

二〇一一年度 大阪教区CS教師研修会講演



教会学校の教師になって、まず不安に感じることは、

説教の作成ということではないでしょうか。牧師に頼まれてCSの働きを始めた人、漠然とCSの教師にあこがれを感じてきたCS上がりの人…。教師になった動機は人それぞれでしょう。しかし、一旦CSの働きに身を投じた人が、おそらく誰もが通る困難の一つは、説教を語る、ということでしょう。いざ語ろうとすると、どのようにして語ったらよいか分からない、ということは誰にでもある経験でしょう。ある時はあまりの忙しさに説教例をまる暗記し、説教をした、ということや、もっと悲惨な例では牧羊者を説教壇に持って説教した、というこ

ともあるかもしれません。そこで、本年のCS教師研修会では、このことにスポットライトをあててみたいと考えています。同時にわたしたちの教団には『牧羊者』という教案紙があります。この『牧羊者』を用いていく前提で、ともに説教作成の過程を学んでみたいと思うのです。

特に、この講座で大切にする言葉は「黙想」：メデーション：つまり、聖書のみ言葉を黙想するということです。黙想にはさまざまな仕方があるのですが、特にここで学ぶことは、「説教のための『黙想』」に限りません。私たちが教会学校の教師として、聖書のみ言葉に向

きあう姿勢は、徹頭徹尾、この「黙想」によるのです。このことを手掛かりにして論を進めていきます。

植村正久先生がこのように語ったと言われています。「大人の説教の準備には一回あればいい。しかし、子どもの説教となると一週間の準備がいる」。このことは私も自分の経験の中でそうに感じています。幼子に対する二〇分の説教と大人への四〇分の説教、その準備のための時間は、実は圧倒的に幼子に対する説教の方が長くなるのです。それは大人が、説教者の語る説教の行間を推測、修正して理解する能力がある半面、幼子には説教者が語られた言葉をそのまま理解することしかできないからでしょう。しかし、このことは同時に幼子を持つ長所でもあります。幼子は、説教者が語った言葉をそのまま理解するのです。

## I. はじめに——聖書を読み思い巡らす

### (み言葉の黙想)——

「主の言葉がエレミヤに臨んだ」(エレミヤ1・2)

子どもの礼拝の説教準備の中で、まず何を第一として行うのでしょうか。それは、「聖書を読む」ということです。その聖書のみ言葉を何回も読むことです。何回も何回も、繰り返し繰り返し、聖書を読むのです。この時、できれば聖書を「声に出して」読むことをお勧めします。聖書は長年にわたって礼拝堂で「朗読」されてきたのです。ですから本来、聖書は思い巡らすと同時に、耳で聴かれることも効果的な書物であると言えます。自らが読んだ神の言葉が自らの耳で聴かれ、それがまた自らの黙想の糧となっていくのです。

ここでの「聖書を読む」という行為において大切なことは、「ひとりの信仰者」として聖書を読むことです。説教を語る者としてみ言葉の前に立つのではなく、ひとりの信仰者として聖書の前に立つのです。ボンヘッファーは、まず説教者意識を捨てて聖書を読むことを求めたそうです。それは大切なことです。「さて、どんな説教を子どもに語ろうか」という思いで聖書に向き合うならば、その意識によってみ言葉が曇らされてしまうことになりかねません。そうではなく、ひとりの信仰者として聖書を読むことが大切なのです。

そしてもう一つ、この時に大切なことは、「受け身」の姿勢で聖書に向き合うということです。何かを読みとろうとするのではなく、あるいは学ぶために、ということでもなく、聖書のみ言葉そのものが自分自身に語りかけるのを待ち望む姿勢です。「み言葉が開けると光を放つて、無学な者に知恵を与えます」（詩篇119・130）とあるとおりです。徹底的に「受け身」になって聖書を読むのです。言い換えると、聖書を「心で読む」ということです。まず、聖書は「頭で読む」のではなく、「心で読む」のです。

この黙想の段階で求められるものは、徹底した「受け身」の姿勢です。それは自分が語ることをやめることです。語るために、語ることをやめるのです。働くことをやめるのです。

この段階の黙想は、一見静かに見えます。しかし、私たちの心の中では様々な葛藤（かつどう）が起こります。聖書が神の言葉として迫ってくれば、その言葉と信仰者自身との間に対話が生まれます。時には、それは信仰者自身の内にある疑いであるかもしれません。あるいは不信仰でもあるでしょう。もちろん、それは神の言葉を聴く喜びの時

でもあるかもしれません。それらの体験は、私たちが「祈り」へと追い込みます。祈らざるを得なくなるので

す。実は、説教作成の全過程の中で、最も大切なものはこの「祈り」の過程です。無私な心で聖書に向き合い、み言葉に聴く中で、心に引っかかる箇所が、きつと登場します。そのことを大切にしてください。そして、その引っかかりをメモしておくのです。すると、知らず知らずのうちにその書き留めておいたメモが生かされることになります。説教作成はそこから始まります。

## Ⅱ. み言葉を学ぶ——神学的黙想——

先程の「み言葉の黙想」をまずしっかりと行った上で、次はそのみ言葉を「学ぶ」作業に入ります。しかし、それでもやはり、まず学ぶべきものは「聖書」です。まずは聖書を観察するのです。

聖書を観察する上で、まず聖書の内容（み言葉そのもの）を観察することから始めます。それには、「いつ・どこで・誰が・何を・どのように・どうした」という、

いわゆる「帰納法的聖書研究」の視点から調べて読み進めます。特に福音書に関しては、主イエスの言葉や行動、つまりイエス御自身に注目することから始めます。み言葉の黙想をしながら、その中で「あれっ？これ、どういう意味？」と、引っかかった箇所を中心に黙想を続けます。その上で、続いて以下の黙想も加えていきます。

## ①他の訳の聖書を比較する

日本語の聖書、ただでも様々な訳の聖書があります。団体が訳したもの、個人が訳したもの、様々な訳の日本語聖書があります。それらを比較することは聖書を学ぶ上で有益です。当該箇所の様々な聖書を比較検討してみると、様々な発見があります。また、ひとつの聖書では分からなかった言葉の意味が見えてくることもあります。また、外国語ができる人は、外国語の聖書も併用してみると、より深い黙想の助けにもなります。聖書翻訳の作業は翻訳者の解釈の結晶です。翻訳聖書を読み比べるだけでなく、「み言葉が立ち上がる」経験（み言葉が生き生きと語りかけて来て、その情景の中に居るような経験）

をすることは少なくありません。特に、英語が多少できる人には、26種類の英訳聖書を同時に見比べることのできる書物もあります。非常に参考になる書物の一つです。

## ②当該箇所の前後の箇所を読む

聖書は、ただ与えられたテキストのみで理解することはできません。その前後に何が書いてあるかも非常に重要な手がかりとなります。与えられたテキストのみにとらわれるのではなく、前後の記事にもよく目を通し、内容を把握する必要があります。

## ③並行記事にもよく目を通す

特に、福音書の記事には他の福音書にも書かれてある記事があります。その記事にもよく目を通すことです。また、新改訳聖書を用いている方は、各節の脚注に関連聖句の箇所が載っています。そこにもよく目を通してみてください。

今述べたことをまとめつつ、同時に私たちが聖書を解釈するにあたって指標となる原則も挙げておきます。

**〔平易の原則〕**… まず、聖書の当該箇所テキストを通読したら、「自然な」意味を探します。聖書はわかりにくい「謎」ではなく、平易に理解できるメッセージであるからです。それは主ご自身の言葉の中にも見出すことができます。聖書を理解するのにあたっては、理解するために無理にこじつけるのではなく、無理のない本来の意味を求めるべきなのです。

**〔歴史の原則〕**… 次に、聖書の原意を求める必要があります。聖書はあらゆる時代の、あらゆる国の、あらゆる人々に向けて書かれたものですが、同時に各部分は、まずその時点においては、特定の時代の特定の国の特定の人々に向けて書かれました。ですから聖書のメッセージは永遠で普遍的であっても、それらは最初に与えられた時代、状況に照らしてはじめて理解できるものです。このような理解は文法的歴史的意義といわれています。

**〔調和の原則〕**… してもう一つ、わたしたちは聖書全体から見なおして、その箇所の意味を理解しなければなりません。キャンベル・モルガンは「前後関係は無視

したテキストの扱い方は、独りよがり過ぎない」と語られたそうです。ですから聖書の最大の注解書は、聖書自身です。そしてバランスのとれた解釈のためには、二つの文脈（前後関係）を把握して、その理解の中で聖書を読む必要があります。その二つの文脈とは、①直接的な文脈（その聖書箇所のある章、段落など）と、②間接的な文脈（聖書の啓示全体）です。その両方が大切です。

以上、「聖書を通して聖書を学ぶ」という学びをしただけでも、み言葉が立ち上がる経験ができると思います。しかし、それだけではなく、はじめの黙想で疑問に思ったことに対する答えを見つけるためには、『牧羊者』の「研究資料」も重要な助けになります。実はこの作業において、初めて『牧羊者』が登場するのです。ここまでは聖書のみを用いた作業でしたが、ここからは『牧羊者』をはじめとする「教案誌」を用いていきます。

『牧羊者』の「研究資料」において求められているものは、聖書のみ言葉の味わいや広がりを助ける働きを担うことです。「研究資料」の執筆者は、与えられた聖書のテキストを味わい、いくつもの資料に当たり、解釈の

難しい箇所を吟味し、色々の解釈の可能性を提示していただきます。そして、その箇所が持っている重要なメッセージを提供してくれているのです。もちろんそのような提示は、全体のほんの一部分に過ぎません。全体を限られた紙面で網羅することは不可能だからです。しかし、皆さんがみ言葉を味わう中で疑問に感じた部分、引っかかった事柄のいくつかについては、参考にできるはずですよ。何よりも、「研究資料」の執筆に当たっては、担当者は様々な注解書に当たり、一つひとつの語句の意味を探り、また語句と語句とのつながりに至るまで念入りに調べ上げて、その上で与えられた「週題」や「年間目標」をも視野に入れて解釈します。そのように書かれている「研究資料」との対話をしていただきたいと考えています。

同時に、皆さんのお手許にある資料にも目を通しておくことも忘れないでください。皆さんの教会、皆さんの本棚にある参考書、注解書にも目を通しておきます。それでも分からない箇所は、教会の牧師先生に聞くことも必要でしょう。そうする中で、黙想から始まったその聖書箇所のみ言葉は、段々と開かれていき、その輪郭がだんだんはつきりとし、立ち上がってくるのです。いわゆる

「み言葉が開かれてくる」という経験へとつながっていくのです。

## Ⅲ. 説教のための黙想

まず手始めに私たちがしたことは、信仰者としての黙想でした。この段階ではひとりの信仰者としての黙想が問われました。それを受けて次の段階では、多少難しい作業がはいりました。いわゆる「聖書の学び」といわれる作業です。この二つの作業を通して、私たちはみ言葉を心と頭とで感じるようになります。しかし、このようなみ言葉を体感しただけではまだ不十分です。続いている作業は、これらの事柄を再び整理し直すことです。この作業は、「説教のための黙想」と呼びます。

この段階では、その聖書箇所が真に語りたいことは何か、ということが、漠然と見えてくるようになります。しかし、実は私たちには、一つではなくいろいろな見え方をしてくるものです。例えば光は、プリズムを通すことによって七つの色にわかれます。皆さんの教会でも、牧師先生は「ポイント」という言葉を用いてその箇所の

内容を示すこともあるでしょう。しかし、特に教会学校の説教に関しては、一本の中心となるテーマが明確にされる必要があります。

さて、そこで『牧羊者』では「目標」と「暗唱聖句」とがあります。これらの整合性が問題となります。牧羊者における「目標」とは、教会学校局が年間目標やカリキュラムを設定し、その流れの中から設定したものであり、決してむげにすることはできません。しかし、説教者がこれまでしてきたような黙想を通して与えられた、幼子に伝えたいテーマ、こうなつてほしいという目指すものがあるのであれば、それをも十分に考慮すべきであると考えています。

しかしながら、そこには段取りがあります。分級を担当される方々は、当然、『牧羊者』や教案誌によつて準備しているはずであり、前の週にはその変更が教会学校教師に対して伝えられていなければなりません。その上で、自らが説教のための黙想の中から与えられた目標や主題（テーマ）に従うべきであると思います。

いずれにしても、主題、語りたい道筋は一つにしばらくべきであつて、ポイントが説教の中でいくつもあるとい

うのでは、聞いている子どもたちにはなかなか伝わりにくいものです。もちろん、サブテーマとしていくつかのポイントがあることは構いません。しかし、私たちが、教会学校の生徒から「先生が一番伝えたいメッセージは何ですか？」と聞かれたときには、それを伝えることができなくてはなりません。「いくつかのキーワードを用いて、短い文章で語ること」ができなくてはなりません。それを見いだしたなら、それを一本の太い幹とします。それに適用、例話、証しなどが枝としてつながり、説教の一つの流れになります。

さて、この場合、注意しなくてはならないことは、「中心テーマ」はあくまでも聖書に土台をおき、聖書から取ってくるべきであるということです。例えば書店の本のタイトルのような、いわゆる人生訓的な内容が中心テーマにふさわしいかどうか、よくよく吟味されなければなりません。説教の土台は、あくまで聖書からとられるべきであつて、書店に平積みされている本の題のようなテーマというのは、説教のテーマとしてはなじまないと思うのです。

あと、いくつか重要な点を考えてみましょう。

# ①手近な黙想書を眺めながら黙想を深めること

自分の思い巡らしを深めるため、他の人が書いた黙想書を読んでみて下さい。「研究資料」のような、字義的な資料ではなく、もう一步、解釈や黙想に踏み込んだものを読んで下さることを奨めます。その一つの例として、『牧羊者』の「聖書講解」はこのための示唆を与えてくれるものです。『牧羊者』の「聖書講解」を読みながら、自らの黙想に更に光を当てて黙想します。そのほかに、皆さんの比較的手近にあり、また教会にもありそうな黙想書としては

- ・旧約（新約）聖書一日一章（榎本保郎著）主婦の友社
- ・旧約（新約）聖書講解（米田豊著）
- ・三分間のグッドニュース（鎌野善三著）

## いのちのことは社

等が挙げられるでしょう。また、説教集をお読みになることも有益です。これらの黙想書や説教集との対話を通

して、説教のための黙想を更に深めていくことが必要です。

ここで、『牧羊者』を用いている方ならば「説教例」（礼拝メッセージ例）がどう書いているか見ます。もちろんこの段階においては、それを参考にすべきです。しかし、あくまでもそれは一つの「参考」として、です。「説教例」を万能薬としてどこでも用いることができる、ということではありません。一つの例示に過ぎないことを心に留めておいてください。あくまでも対話の一例として眺めてみることをお奨めします。

同時に、これらの資料は、絶対正しいというものではなく、一つの例であることもわきまえておく必要があります。決してこういった書に左右されるのではなく、それらの書物を鵜呑みにしないで、批判的に対話することが必要です。その時に大切なことは、それまでの二つの黙想をいかに念入りにおこなったか、ということですが、繰り返しますが、み言葉の黙想はここでも問われます。

私事になりますが、筆者がこのような説教準備を行う中で最も問われているのが、実はこのことなのです。み言葉の黙想を文書にし、様々な注解書や説教集との対話

の中で、いつの間にか自らのみ言葉の黙想がかき消されてしまっていることがしばしばあります。ある説教の指導者にこのことを話しますと「それは第一の黙想（み言葉の黙想）が足りないからです」と指摘されました。もったもなことです。一つのみ言葉から説教が生まれてくるためには、すべての土台として「み言葉の黙想」があることを忘れてはなりません。

## ②同時に聴衆の黙想も深めよう

この黙想においても一つ求められることは、聴き手に対する黙想です。子どもたちの現実を見つめつつ、祈り、適用することを考える必要があります。このメッセージを語ったら、子どもはどう聞かろうか、どうとらえるだろうか、といったイメージを常に持ちつつ、み言葉に耳を傾けるのです。同時に子どもたちの世界の言葉も獲得する必要があります。子どもが身近に感じることができるような世界の言葉で語れるようになります。例えば、祈りにおいて「ご在天ごてんの父なる御神様、あなたのご宝血ごたけちを感謝します」と祈りをささげても、子どもの

頭の中には（？）のマークがいつばい登場するはずで。大人の堅い表現ではなく、子どもたちの世界の言葉で語れるように黙想することも必要です。しかし、それはただ単に子どもの言葉を用いればそれでいいということではありません。教会で用いる言葉には品格が問われます。特に、公の場での言葉には注意すべきです。子どもがわかる言葉を用いつつ、それでいて主の御前で用いる言葉であるべきなのです。

それからこの段階では子どもたちのための「とりなしの祈り」も欠くべからざる要素となります。子どもたちの家庭的・社会的状況に思いを巡らし、それらが自然ととりなしの祈りへと向かっていくのです。それは説教の言葉にも自然とあらわれます。同時にそれは、主とその言葉への期待となつてあらわれます。

しかし、それらの黙想においては、ただ単に今現在目の前にいる子どもたちだけではなく、その子どもたちを取り巻く世界の現実をも理解することが求められます。目先の子どもたちだけではなく、彼らを取り巻く家庭、社会の現状、学校、その他あらゆる世界の現状を理解する目が必要です。そのことによって、わたしたちの黙想

の世界はさらに広がっていきます。

### ③自らの魂の吟味も忘れずに

説教者は、自分のことを棚に上げて語るものではありません。説教者は、聴衆に語る前にまず自分自身に語るのです。時には密室で悔い改めを迫られます。また時には新しい発見をして主を見上げる経験をします。「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇139・23、24)とあるとおりです。そのようにして、私たちは主の御手の中で練られ、造り変えられていくのです。しかし、この作業は説教作成過程のどの段階でも起こりえることです。説教を語るということは、まず神が私たちにみ言葉を語って下さる、ということなのです。それをしっかりと心に留めるのです。

### おわりに

#### これまでの黙想の目指すもの

#### —イメージによる言葉の発見—

黙想は、この先に続く説教の言葉の発見の過程です。子どもはイメージで聖書の世界を理解します。しかし、大人はいつの間にかこのイメージを手放してしまうのです。イメージをもって聖書を読むことを手放してしまっているのです。もしかするとこの「イメージで聖書を読む」ことを良くないことと考える方もおられるかもしれません。しかし、聖書を読む中で求められるものは想像力です。行間を読む力です。幼子のような想像力を大切にしてください。そのためには、私たちが様々な世界に触れることも必要でしょう。(次号「後半」に続く)

# 聖書 テーマ マタイ13・1～9、18～32 み言葉が実を結ぶために

## 序論

(金井信生)

イエスは多くのたとえをもつて神の国の真理を説き明かされました。この「種をまく人」のたとえの意味は、イエス自身が説き明かしておられます。

## 一、み言葉にある命

種まきがまく種とは、《御国の言》すなわち神のみ言葉です。そして種が芽生えるのは、種の内に命があるからです。この命には人を生かし、豊かに実を結ばせる力があります。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きる」(マタイ4・4)との言葉は、人間を観察して得た結果ではありません。人間を造られた方による説明です。

イエスはまず《種まき》となつてみ言葉を語られました。それは自分の栄光のためではなく、私たちに命が必要だからです。

命は何もないところには生じません。必ず命から命が

生れます。そして生れた命は、養われ守られなければ消えてしまいます。私たちの命は神から与えられたものであり、神から離れたところでは保つことができません。神と言葉を交わす交わりの中でさらに豊かなものとされていきます。

## 二、時が試練

土地の状態そのものは、種が落ちた時点である程度わかります。しかし、神の言葉という種が蒔かれた人の心の状態は、すぐにわからないことがあります。しかし、どんな心であるかは、観察している中で、時間の経過とともに明らかになつてきます。

《道ばた》に落ちると、種は接触していますが、中に入ることはありません。これはみ言葉を聞いても自分に結び付けない人です。《石地》に種は入っていきますが、根を下ろすことはできません。み言葉を聞いて喜んでいくようですが、生き方を変えるつもりはありません。

《いばらの地》の間では根を下ろし芽が出て、上に伸びることが妨げられています。み言葉が中心でも第一でもなく、他のことで心がふさがれているので、実を結ぶに至りません。

しかし、もし良い地に種が落ちるなら、種は入り込み、しっかりと根を下ろし、充分に伸びて豊かに実を結ぶことができます。

み言葉に対するこれらの応答は、私たちが福音を伝える相手の状態であり、またかつての私たちの姿です。

聖書の時代の農業は、種を蒔いてから耕す方法だったとも言われています。土が薄く、日本のように畑と道がはつきりと分けられていないところに種を蒔き、後から耕したところが畑となつて成長していったというのです。この方が、み言葉と私たちの関係に近いかもしれません。最初からよく耕された柔らかな心というものはありません。とにかく種を蒔き、耕すことが必要です。み言葉を聞き、日々の歩みの中で苦しんだり戦ったりする中で、み言葉の助けを得、やがて実りを得ることが多いのではないでしょう。

### 三、約束されている収穫

良い地であっても、種がまかれなければ収穫はありません。しかし、一度種が蒔かれると、最後の結果ははっきりと違ってきます。特にイエスはみ言葉の収穫は驚くほど大きいと約束されました。私たちもキリストを信じ、

み言葉を聞き始めても、最初から大きな変化はないように見えるかもしれません。しかし、み言葉を聞き続けるときに、必ず変わってきます。

ですから、できるだけやわらかい心、聴いて従う心をもつことが大事です。また、毎日の出来事の中で、み言葉をあてはめて、慰められたり、進む指針を得たり、あるいは自分の考え違いを示されること、これがみ言葉の種まきです。

まかれた種が収穫に至るには、時を要します。世話も必要です。しかし、み言葉の種がまかれなければ、人は生きられないのです。イエスが忍耐深く、み言葉の種をまき続け、ようやく弟子たちが整えられていったように、私たちも自分に対して、周囲に対して、種をまき続けましょう。豊かな収穫があると約束してくださった神は、必ずみ言葉を聞き続けるものを成長させ、祝福してください。

### 結論

命の種である神のみ言葉を聞いて悟り、忍耐深く守って、豊かな実を結ぶ者となりましょう。

## 研究資料

(金井由嗣)

本日の箇所原文出处には、特に釈義に影響するような特別な用語や構文は見られない。原典にこだわるより、良質の翻訳聖書で前後の文脈に注意して繰り返し読むことが大切である。

## テキスト

1 その日 前章の記事との連続性を強調。マタイでは12・13・52が同じ安息日の出来事として描かれているが、マルコの並行箇所では間にくつかの出来事が挟まれている。マルコは、それぞれのエピソードに対して類似した別の時期の出来事を関連付けて記しているのかもしれない。いずれにせよここでは、このたとえば語られた時期に注意する必要がある。パリサイ人や律法学者からの批判と疑い、主の家族からの無理解は、主イエスを神から遣わされたメシアと信じる弟子たちにとってつらい経験であった。群衆は主イエスのもとに集まっているが、その多くは病気の癒しなどの奇跡や実利を求めている。少し前(11章)にはバプテスマのヨハネさえ、イエスが本当にメシアなのか、と

疑問を漏らしていた。弟子たちは、神の国の福音が期待したようには多くの人々に受け入れられない現実を前にしていた。このような弟子たちに対する主の励ましと教育が、13章の一連のたとえの骨子をなしている。

3 9 種まきのたとえ たとえの意味は明瞭であり、その解釈も主イエスが自ら教えているとおり(18・23)なので、解説は不要である。

11 天国の奥義 これほどに説明が容易なたとえを、主イエスが「奥義」と呼んでいることに注意したい。たとえのそれぞれのモチーフが何を意味するか、頭で理解しただけではこのたとえの「奥義」を知ったことにはならない。それはなお、「聞いても悟らず、見ても認めない」鈍い心にとどまっている状態である。二つの側面から考察する。

1、「奥義」は、「天国」の性質にかかわっている。マタイは神の名を使用することを忌避するユダヤ人の伝統に従って「天国」と呼び変えているが、他の福音書で用いられる「神の国」と同義語である。当時のユダヤ人の「神の国」理解では、旧約聖書、特にダニエル書のイメージが支配的であった。それは地上の権力を無力化する圧倒的な力をもって君臨すべきものであり、誰もその力には抵抗できないは

ずであった(ダニエル2・44など)。ところが、このたとえばは神の国(天国)が人間の側の応答によって左右され、拒否され得るものとして描かれている(ハンター、ラッド参照)。それゆえ、重要なのはみ言葉を聞く者の聞き方と、聞いたみ言葉に対する応答の態度である。神の国は華々しく地上を支配するのではなく、多くの反対や無関心に出会いながら、福音を積極的に受け入れた少数の人々の間で少しずつ成長し、やがて実を結ぶものなのである。この後に続いたとえ(麦と毒麦、からしだね、パンだね)によって、さらにこの点が強調される。

2、「奥義」には、知的な理解ではなく喜びと祝福が伴う。16〜17節で主が語っているのは、旧約の預言者や義人が熱心に願っても見聞きすることができなかった福音に弟子たちが与<sup>あづか</sup>っていることの喜びである。まかれた種の多くが実を結ばなかったとしても、「百倍、六十倍、三十倍」という当時の常識を超えた収穫の喜びが損失をはるかに上回ることになる。このたとえの焦点は、この収穫の喜びに当てられている。それはまた、11・25〜30の主イエスの言葉と同じ方向を示している。「知恵ある者や賢い者」ではなく、み言葉を聞いて素直に受け入れる「幼な子」に神の

国の奥義(福音)が啓示される。奥義を理解するために必要なのは知的能力ではなく、イエスの弟子として生きる、単純な信仰である。

## 12 持っている人は・・・いよいよ豊かになる

後の主イエスの説明で明らかのように、天国の奥義を持つている人とは、福音を素直に受け入れて従う主イエスの弟子たちのことである。この箇所の人々がそうであったように、福音に聞き従いつつ主に近づいていく人には、さらに福音の奥義が解き明かされる。それゆえ、聖書のみ言葉に対する知的理解も次第に備わっていくのである。それに対して、知的理解にとどまって本気で福音を受け入れない人には、み言葉はますます理解困難なものとなっていく、知的に理解することさえ不可能となってしまうのである。

参考図書 織田昭『マタイによる福音』、A・M・ハンター『イエスの譬えの意味』、G・E・ラッド『神の国の福音』、藤巻充『祝宴への招待』、J. Nolland (New International Greek Testament Commentary) D. L. Turner (Baker Exegetical Commentary)。

## 聖書

## タイトル

## 暗唱聖句

マタイ13：1～9、18～23

豊かな実を結ぼう！

ほかの種は良い地に落ちて実を結び、

あるものは百倍、あるものは六十倍、

あるものは三十倍にもなった。

## 目標

み言葉を聞いて悟り、忍耐深く守って、実を結ぶ者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

めぐみさんは、毎日電車で通学していました。ある時、悪天候のため電車が大変遅れてしまいました。すると駅の構内放送があり「今日は、ご迷惑をお掛けして申し訳ございません。ただいまバスを・・・」と声があつたとたん、めぐみさんはバスに乘ろうと急いで駅から飛び出しました。でも、バスはなかなか来ません。めぐみさんは、バスがすぐに来ると思つて外に出ましたが、案内放送は「ただいまバスを用意しておりますので、もう少しばかりお待ちください」とのことでした。案内を最後までよく聞かなかつためぐみさんは、寒い中バスを待たなければなりませんでした。

皆さんは、人の話をしっかりと聞いていますか。

## み言葉の種がまかれています

イエス様は、聞くことの大切さを教えるため、弟子たちに種まきのお話をされました。イスラエルの種まきは、豆まきのように種を畑にまきます。

ある人が種をまきました。まいている間に、ある種は、道ばたに落ち、鳥が食べてしまいました。ほかの種は、石だらけで土の少ない石地に落ちました。そこは、土が浅いのですぐ芽を出しましたが、日が昇ると焼けて根がないために枯れてしまいました。ほかの種は、いばらの間に落ちました。やがていばらが伸びて種をふさいでしまいました。でも、ほかの種は良い土地に落ち、ぐんぐんと成長して豊かな実を結ぶことができました。

まかれた種は、いろいろな土地に落ちました。皆さんも野菜や花の種をまいたことがあるでしょう。植物がちゃんと成長するのに大切なのは、土です。いくら良い種をまいても土が悪いと育ちません。

イエス様が言われた種とは、み言葉の種です。そして、土とは皆さんの心です。皆さんは、毎週教会に来てみ言葉を聞いています。それは、神様がいつもみ言葉の種を

皆さんの心にまいてくださっているのです。

**種はどのように落ちていきますか？**

神様のみ言葉の種は、どのような心にまかれていますか？

道ばたとは、み言葉を聞いても、右の耳から左の耳に抜けて、すぐに忘れてしまう心です。石地とは、み言葉を聞いて「よいお話だった」と喜んで受け入れますが、それをしっかりと心に留めていないので、苦しいことや悲しいことがあるとすぐにつまずいてしまう心です。また、いばらとはみ言葉を聞いてもゲームやテレビなどの誘惑に負けてしまう心です。でも良い土地とは、み言葉を聞いて悟る心です。

毎週、皆さんはどのような心でみ言葉を聞いていますか？

**豊かな実を結ぶ**

旧約聖書に「聞け、イスラエルよ」という大切な言葉があります。神様は、私たちが、神様の言葉をしっかりと聞くことを願っておられます。

毎週、聖書のお話を聞きますが、皆さんは「僕には関係ないなあ」、「そんな昔の話、わたしは興味なくい

と、別のことを考えながら聞いてはいませんか。また、暗証聖句をして、み言葉をその時は覚えていても、教会学校が終わると、「あれ、今日のみ言葉何だったけ？ まっいつかあゝ」、なんてことないですか。

聖書のみ言葉を神様の言葉として聞きましょう。そして「このみ言葉は、僕にとつてどのような意味があるのだろうか」とか、「神様は、わたしに何を教えようとしているのだろうか」という心で聞きましょう。そうするなら、み言葉の種がみなさんの良い心の土地にまかれて、豊かな実を結びます。その豊かな実とは、神様の祝福によって、愛の人にされることです。神様がみ言葉を通して結ばせてくださる愛の実は、自分だけでなく周りの人たちをも幸せにするのです。

**まとめ**

神様は、皆さんに愛の実を結ぶ人になって欲しいと、み言葉の種をまいてくださっておられます。それを、み言葉をしっかりと聞く心で受け止めましょう。今日のみ言葉は、良い土地にまかれたでしょうか。

♪わたしは主の子どもです♪

(ホーリネス子どもさんびか 88)

# 聖書 出エジプト2・1～10 テーマ 危機の中での信仰

## 序論

(金井信生)

やがてイスラエルの民をエジプトから導き出す指導者として用いられるモーセですが、その誕生の時から人知を超えた神の救いの手が働いていました。また、危機の中で信仰を働かせた人たちがいました。

## 一、危機の中でただ主に委ねる

創世記の最後に、エジプトに移り住んだヤコブの子孫は大いに増えました。これを恐れた新しい王は、ヘブルびとを奴隷として苦しめました。それでもヘブルびとは増え、非常に強くなりました。そこで、王は生まれてくるヘブルびとの男の子はナイル川に投げ込むように命じました。その状況の中でモーセは生まれました。

両親は生まれた男の子を救う決心をし、「信仰によって」(ヘブル11・23) 三カ月の間、隠していましたが、成長するにつれて隠しきれなくなりました。

男の子はパロの命令に従ってナイル川に連れてこられ

ました。ただ、両親は子どもを主の手に委ね、パピルスで編んだかごに入れて、葦の茂みに置きました。

《かご》と訳されている言葉は、ノアの洪水の「箱舟」と同じ言葉です。動力も舵もたず、ただ流れに任せるままの乗り物です。しかし、ノアもモーセの両親も信仰をもって、最善をなされる主の手にすべてを委ねました。またノアが鳩を放つて確かめたように、ここでは、モーセの姉がこの男の子がどうなるのかを見守っていました。

## 二、危機の中に備えられた救いの道

そこに王女(パロの娘)が身を洗うために、川に降りてきました。そしてかごと、その中の子どもを見つけました。顔つきで分かったのか、身を包んでいた布の柄やデザインで気づいたのか、王女はその男の子がヘブルびとの子であることに気づきました。

王女もパロの命令は知っており、「かわいいそうに」思ったところに、モーセの姉が近寄って「あなたのために、この子に乳を飲ませるうばを呼んでまいりましょうか」と声をかけました。

まだ王女は、その子をどうするか決めていませんでし

たが、もうすでにその赤ちゃんの責任を王女が持つっているかのような声掛けに、王女は決心してその言葉に従いました。

王女が川に降りてきたタイミングと、そのあわれみの心を主は備えておられました。また、見守っていた姉に、恐れないで王女に声をかけ最善の言葉を口にする知恵を与えられたのも主です。両親から始まって、危機の中でも危機を恐れず主を畏れる人が、祈り決心して行動する時、主はまことの神を知らない者をも思わぬ協力者として用い、救いの道を備えてくださいます。

### 三、危機を祝福に変えられる主

パロの命令は、エジプト中のすべての民に向けられていましたが、王女は従う必要がありませんでした。結果、男の子はモーセと名付けられて、宮中での教育と訓練を受けることができ、やがてイスラエルの民を率いるのに役立てることができました。

また、幼少時に母のもとで育てられたことにより、主を畏れる信仰の土台が据えられました。ナイル川に流されて終わるはずだった赤ん坊の生涯は、主の不思議な手

によって、信仰の基礎と最高の教育を与えられることになりました。

私たちも時に危機的な経験をすることがあります。しかし、イエス様を信じ救われたこと自体が、最大の危機から主の恵みによって救われた経験だったのです。スポーツなどで、「失うものは何もない」と挑戦していく言葉を聞きます。私たちも恵みによって救われ、生かされた者であることをおぼえて、危機の中で主に委ね、また知恵と勇気を与えられて、大胆に主の道に歩むことができます。

### 結論

モーセを水の中から引き出された主は、私たちも罪と滅びの中からすでに救い出してくださいました。なお危機を感じることもあっても、その中で神の守りと助けを経験する者となりましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

へブル人に生れた男の子をナイル川に投げ込めとのパロの布告は、イスラエルの全滅を意味した。これに抵抗する手段は人間的にはないように思われた。まさにイスラエルは危機を迎えたのであるが、その中で信仰によって歩んだ両親がいた。イスラエルの指導者モーセは、この信仰の中で生かされ、育てられたのである。

## テキスト

1 レビの家のひとりの人 出エジプト6・20によれば、これはアムラムであり、**レビの娘** とはヨケベデである。

2 **その麗しいのを見て** ステパノはモーセについて「まれにみる美しい子であった」(使徒7・20)と表現している。ここは新共同訳では「神の目に適った美しい子」としており(新改訳も類似)、こちらの方がギリシャ語本文に即している。両親は信仰によって、この麗しさは神がこの男の子に特別のご計画を持っておられるしるしであると直感した。生きた信仰をもっている時、非常に小さな手がかりから神の顧みを信じ、勇気を得ることが

できる。隠していた この行為は、単に親としての情からなされたものではなく、神は、この子を顧みてくださったという信仰、さらには、神はご自身の民を必ず守られるという約束に対する信仰による行為であった(へブル11・23)。彼らは「王の命令をも恐れなかった」(同)のである。たとえ危険が伴っても、信仰は行動という結果となつて表われる。

3 もう隠しきれなくなったので 3ヶ月になった健康な赤ん坊の泣き声は大きいため、これ以上隠すことは不可能になった。ヨケベデは「ナイル川に投げこめ」というパロの命令の通りにしたが、できる限り生き延びることのできる手段を取った。**パピルス** 茎高約2メートルで葉は毛髪のように頂上に固まって生じる。この茎を編んで、防水のためにアスファルトを塗って舟造った。

かご(ハーパー) 創世記6・9章の「箱舟」と同じ言葉。**ナイル川の岸の葦の中においた** おそらく浅瀬であり、かごが流されることがなく、また何もない岸部よりはワニなどに襲われる危険が少ない場所であった。

4 **その姉** ミリアム(民数記26・59)。事の成り行きを見守っていたのは母親でなく姉であった。この時母親

は、自分の子を完全に神にゆだねていたのであろう。

**5 身を洗おうと** 古代エジプトでは、神聖なナイル川で水浴びすることは、身を清めるだけでなく、寿命を長くすると信じられていた。

**6 かわいいように思つて** パロの娘が王の命令にもかかわらず、ヘブル人の子にあわれみの情を抱いたのは女性特有のこまやかな愛情、本能的ともいえる母性愛のゆえであろう。しかし何より、神の御力が暴君の近くににいる人々の心に、善意と柔和な愛を置いたのである。古代エジプトの王女は非常に権勢があつて、王の命令にもかかわらず、ヘブル人の男子を王子のように養育することができたのである。彼女は無意識のうちに神の救いの御計画に参与することになった。

**7～9 モーセの姉は、パロの娘が赤子にあわれみの情を抱いたことを知ると、神からの知恵と勇氣を持つて、間髪を入れずに乳母を呼んでくることを申し出た。わたしはその報酬をさしあげます** 母親は自分の子どもを十分な賃金をもらつて育てることになった。しかもエジプト王家の庇護のもとにあつて、迫害のさなかにも安全に育てることができるようになったのである。後年、モー

セはエジプト王家の一員としての扱いを受けながらも、ヘブル人としての民族感情に燃え、ついにエジプトを向こうに回して戦うようになった。それは、幼い頃ヘブル人である母親ヨケベデに育てられた事が、大きく影響していたと考えられる。この箇所には「神」という言葉は出て来ないが、エジプトにおけるイスラエルを深く顧みられる神の御手が背後にあることを強く感じさせる。

**10 モーセ(ハ)モーシエ** ここではモーセの名の由来について、パロの娘が水の中から「引き出した」(ハ)マァーシャー」という語呂合わせから説明されているが、そのモーセは自分の民をエジプトから「引き出した」者でもあつた。この名についてはエジプト語を考慮して、「生む」とか「子」を意味する「メス」に由来するという見方もある。

**参考図書** 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約Ⅰ』(いのちのことば社)、レオ・G・コックス「出エジプト記」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇Ⅰ』(イムマヌエル綜合伝道団)、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書注解』(いのちのことば社) 他

## 聖書

出エジプト2・1～10

## タイトル

必ず助けてくださる！

## 暗唱聖句

信仰によって、モーセの生まれたとき、  
両親は、三か月のあいだ彼を隠した。

ヘブル11・23

## 目標

危機の中で、信仰によって神の助けを  
求める。

## 導入

(飯田勝彦)

「今週も信仰によって歩みましょう」と、よく聞きますね。「信仰、信仰って言うけど、どういうこと？」と思つたことありませんか。信仰とは神様を信頼すること、神様を頼りにして歩むことです。神様を頼りにして歩むことは、私たちの力となり支えとなります。また、神様を信頼して歩む人に、神様は不思議なことをしてくださいます。

## パロのびびり命令

さて問題です。ピラミッドで有名な国はどこでしょうか？

そう、エジプトです！

今から、約四千年も前にイスラエルの人々は、エジプトに住んでいました。彼らには、次々とたくさんの赤ちゃん

が生まれ、だんだんとその数が増えていきました。すると、それを恐れる者がいました。それがエジプト王パロです。

パロは、数が増えて行くイスラエルが国を奪うかもしれないと警戒しました。そこで、パロが考えたことは、イスラエルの人々を苦しめることでした。彼らを無理やりに苦しい労働をさせ、奴隷として扱ったのです。ところが、イスラエルの人々の人口は、減るどころか増え続けていきました。それを知ったパロは、助産婦に「イスラエルの人々に男の赤ちゃんが生まれたら殺せ！」と命令を出したのです。でも、この助産婦たちは皆、神様を畏れていたので、パロの命令に従いませんでした。それで、パロは「ヘブル人に男の子が生まれたら、みなナイル川に投げこめ」と、すべての民に命令しました。イスラエルの民は、このパロのひどい命令によって、危険な中に追い込まれてしまいました。

## 神様への信仰

そんな中、レビ人の夫婦の間に可愛らしい男の赤ちゃんが生まれました。それがモーセです。この夫婦はパロの命令を知っていました。

皆さんがこの両親だったらどうするでしょうか。

命令に従わなければ子どもだけでなく、自分たちも殺され

てしまいます。

モーセの両親は悩んだでしょう。でも、彼らはパロの命令に従わず、モーセを三ヶ月間も隠しました。それは、非常に危険なことでしたが、両親の神様への信仰から来るものでした。両親は、神様が必ずモーセを守ってくだることと、イスラエルの民族を守ってくださることを信じたのです。

モーセの両親は、「今日もこの子を守ってください！」

と、必死に神様に祈ったに違いありません。モーセは、両親の愛と神様への信仰によってすくすくと育って行きました。泣き声も大きくなり、両親は、もうこれ以上隠しきれないと思いました。それで、モーセをかごに入れて川岸の葦の茂みに置いたのです。両親にとつて子どもを手放すことは、どんなにか辛いことだったでしょう。でも彼らは、すべてを最善にしてくださる神様の御手に我が子を委ねたのです。ここにも両親の神様への信仰がありました。

皆さんは、モーセの両親のように神様に信頼していますか？

### 神様の助け

川に置かれたモーセの様子をそっと見ている人がいました。モーセのお姉さんです。彼女が見ていると、パロの娘が水浴びのために川に降りてきました。すると彼女は、か

ごに入れられたモーセに気付きました。「モーセが殺されるかも知れない」。モーセの姉に緊張が走ります。しかし、パロの娘はモーセのことをかわいそうに思い、助けたのです。すかさずモーセの姉がパロの娘に近寄り、「モーセにお乳を与える女性を紹介しましょう」と声をかけました。すると、パロの娘はすんなりとそれを承諾したのです。そのことによってモーセは助けられただけではなく、実の母親からお乳を飲んで成長することができたのです。そして、大きくなるまで両親のもとで育てられました。

神様は、両親の神様に対する信頼を裏切ることとはされませんでした。やがてこのモーセがイスラエルの民を救うリーダーとなっていくのです。

### まとめ

私たちの生活の中でも「これはどうしよう。困ったなあ」という事に出くわす時があります。その時こそ、モーセの両親のように、私たちを助け見守ってくださる神様に信頼してください。神様は不思議なようにあなたを助けてくださいます。

♪おそれないでいこう♪

(ホーリネス子どもさんびか 97)

# 聖書 出エジプト3・1～12 テーマ 臨在の主による派遣

## 序論

(金井信生)

モーセがミデヤンの荒野に逃れて40年が経ったとき、シナイの荒野にある神の山ホレブで、主の使いがしばの中の炎のうちに現れました。これは主がモーセを召し、イスラエルの民を救い出すために特別な使命を託されるためでした。

## 一、くつを脱ぎなさい

主はモーセに語りかけ、〈足からくつを脱ぎなさい〉と命じられます。そこは〈聖なる地〉だからです。この〈聖なる〉という言葉は「神に属する」という意味です。この場所と取り巻く荒野に何の違いもありませんが、ただ主がそこにおられるゆえに〈聖なる〉ところとされたのです。

これは、自分の力で同胞を救おうとして失敗し、荒野で無為に時を過ごして年老いたモーセの姿です。もはや自分になんの誇るところもありませんが、ただ主の選びの中で聖別され、主の用に用いられていくのです。

くつを脱ぐのは、これまでも主の御守りがありましたが、ここからは主が共におられることを受け止め、主を導き手として自覚しながら従っていくことを具体的にあらわすためです。

## 二、わたしはあなたを遣わす

主はモーセに、自らを〈わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である〉と名乗られます。モーセにとって荒野の40年は十分に長いものでしたが、主は四百年も、ご自分の民を連れ帰る時を待っておられたのです。

また、エジプトで苦しむわたしの民の悩みをつぶさに見、叫ぶのを聞き、苦しみを知っていると、救いの動機を告げられます。モーセは自分の思いで同胞を救おうとして、かえって人の声を恐れしました。主は人の思いに応えて救おうとされます。

そして、エジプトから導き上って、良い広い地、乳と蜜の流れる地に導くと、救いの計画を明確にされました。かつて飢饉<sup>ききん</sup>を逃れてエジプトに下り、ゴセンの地、またエジプトの国で最も良い地、ラメセスの地（創世記47・11）に住みましたが、そこは奴隷の地と変わりました。

主は始祖アブラハムに約束された地へ導こうとしておられます。

その上で、計画の実現のために、わたしはあなたを遣わすと、モーセに語りかけられました。

モーセがエジプトに遣わされてパロの前に立つとき、中途半端な気持ちではなく、主から全権を託された確信をもって立たなければなりません。主は、ただモーセのそばにただで共にいるというのではなく、ご自分と心をついて進ませるために、内にあるすべての思いをモーセに打ち明けられました。

ただモーセは、主の御思いを受け取るに当たり、自身について恐れと不安がありました。

### 三、わたしは必ずあなたと共にいる

「わたしは何者ですか、このわたしが導き出すのですか」とモーセは主に尋ねます。モーセに40年前の若さも勢いも自信もありません。しかし主はそのいずれも求めておられません。ただ主に委ね従う信仰を求めておられます。

もしモーセが何者かであるとすれば、それも主の御計画の中に導かれてきたことでした。ナイル川から引き出されたのも、信仰を実母から受け、王女から教育を受けたの

も、挫折と荒野での40年も、すべて主の計らいでした。

最後にモーセが持たなければならなかったのが、主の言葉にそのまま聞き従う信仰です。やがてパロのもとに遣わされるとき、モーセは「イスラエルの神、主はこう言われる」と、主の言葉をそのまま伝えなければなりません。主が杖を投げよ、手をふところに入れよ、ナイル川を打てと命じられると、その通りしなければなりませんでした。

同胞である神の民にも、主の言葉を伝えて喜ばれるときと反発されるときが起ってきます。何が起ころうと、〈わたしは必ずあなたと共にいる〉との言葉は、いつも変わらずにモーセを勇気づけ、使命に立ち帰らせました。やがて神の民をこの山に導くとき、モーセも民と共に主の御真実を崇める者となるのです。

### 結論

私たちも、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたと共にいるのである」(マタイ28・20)と、復活の主の言葉をいただいています。救われた喜びに輝き、主が共におられることを信じて、主の救いの働きに遣わされていきましよう。

## 研究資料

(小平徳行)

モーセの召命の記事である。モーセが神によって遣わされることになったのは、自分の意志で同胞のために立ち上がるうとした時から40年後のことである(使徒7・30)。

## テキスト

1 エテロ モーセの妻の父であるが、「リウエル」(出エジプト2・18、民数記10・29)、または「ホバブ」と呼ばれている所もあり(士師記4・11)、同一人物と考える人もいる。しかし「(義理の)父」という語の意味するところは幅があり、妻の父親をさすこともあれば、妻の伯父(叔父)、さらには祖父をさすこともある。したがってエテロはチツボラ(妻)の父親、リウエルは彼女の祖父、ホバブはエテロの兄弟であると考えられることもできる。**羊の群れを飼っていた** モーセはエジプト人には忌み嫌われていた羊飼いの(創世記46・34)を40年間することになった。エジプトのあらゆる学問を極め、言葉にもわざにも力があつたが(使徒7・22)、それで神による訓練は終了したのではなかった。人生の最盛期と言える時期をこのような形で過

ごさせることは、人知をはるかに超えている。エジプトの教育で得ることのできないものを、この荒野において学ばせたのである。**ホレブ**「乾燥した場所」の意味で、「神の山」と呼ばれている。モーセが後に、神から律法を与えられた山であり(申命記4・10〜15)、エリヤもここで神から啓示を受けた(列王上19・8)。シナイとも呼ばれる(出エジプト19章)。ホレブは山脈の名前であり、シナイはその中の小範囲のグループの山々か、ただ一つの峰の名前であろうとか、逆に、ホレブはシナイの一部であろうという説があるが、推測の域を出ない。モーセは羊を追って、この山にやってきたが、後に彼は神の羊を率いてこの山に来ることになる。

2 主の使 創世記18章、士師記6章同様、主の使いと神御自身とは混ざり合い、区別をつけることはできない。現われたのは主の使いであるが、語られたのは主である。臨在される主ご自身を意味するのであろう。この主の使いを受肉前のキリストとみなす人もいる。**しば** 木の小枝のこと。燃えればたちまち燃え尽きてしまう部分であるが、このしばは燃え尽きなかった。このしばは、一般にはアカシヤの木であつたと考えられている。**しばの中の炎** 主がシ

ナイ山に下られた時（出エジプト19・18）もそうだが、火はしばしば神の臨在の象徴であった。また火は神の聖さを表す。

5 くつを脱ぎなさい この行為は、自分がしもべであることを受け入れ、相手の命令に絶対服従してそむかないことの表示である。また古代東方では聖所に入る時にくつを脱いだ。聖なる方の前に立つ者の心構えを表している（ヨシュア5・15）。**聖なる地** ここが聖なる地と言われるのは神の臨在のゆえである。「聖なる」〔ヘ〕コーデシュ〕が聖書で使われるのは、ここが最初である。

7 わたしの民の悩みを、つぶさに見…彼らの叫びを聞いた。わたしは…彼の苦しみを知っている 神はご自身の民の悩み、苦しみを知らないお方ではなく、民の悲しみの叫びを注意深く聴いておられる。

8 乳と蜜の流れる地 この表現は最初、遊牧民によって使われた。家畜を養うための牧草が豊富にあり、蜜蜂が好む草花や樹木が繁茂する地のことをこのように表現したのである。後には、農産物が豊かにとれる地をも意味するようになった。

10 さあ、わたしは、あなたをバロにつかわして モーセ

が神の働きのために遣わされることになったのは、荒野で十分に訓練を受けた後であって、40年前のモーセではなかった。神が遣わされる時に、はじめて人は主の働きに用いられるのである。

11 わたしは、いったい何者でしょう モーセは40年前の失敗、そしてミデヤンの荒野の学校で謙遜を学び、自分の無力を悟っていた。しかし、神への信頼に欠けていた。単に自分自身だけを見ているならば、何事もすることはできない。

12 わたしは必ずあなたと共にいる これは自分に与えられた使命に対し、圧倒的な無力さを自覚して抗議したモーセに対する神の答えであった。「わたしは…いる」とは、後の14節で説明される神御自身の名と関わりがある。モーセに必要なのは、彼自身の人間的な力でも身分でもなく、主が共におられる事であり、主が遣わしたという事実である。しるし これは常に信仰に伴うものである。このことは聖書を一貫している真理である。とにかくモーセは、信仰によって前進しなければならなかったのである。

参考図書 7月8日分の他、The IVP Bible Background Commentary: OT.

## 聖書

## タイトル

## 暗唱聖句

## 目標

出エジプト3・1～12

あなたは選ばれています！

わたしは必ずあなたと共にいる。これが、わたしのあなたをつかわしたる

しである。出エジプト3・12

私たちを働きに遣わされる神が、私たちと共にいることを信じる。

## 導入

(飯田勝彦)

健治君は、冷房で身体が冷えて、風邪を引いてしまいました。最初は微熱でしたが、こじれて39度まで上がってしまいました。お母さんは「健治、病院に行つて注射してもらおう」と言うのと、「注射なんていやだ！病院なんて行きたくない！」と泣き出しました。お母さんは、「大丈夫、お母さんが一緒にいるから。注射なんてすぐに終わるよ」となだめて、健治君を病院に連れて行きました。いざ、注射の時、健治君は目を堅く閉じ、お母さんの手をグッと握っていました。「チクツ」とはしたものの、泣かずにがまんすることができました。お医者さんが「よく頑張ったね」と声を掛けると、「うん。お母さんが一緒だったから」と

答えました。

皆さんも、一人では寂しいけど、誰かが一緒にいると力や勇気が出たことがあるでしょう。

## 神様を選ばれたモーセ

モーセは、エジプトで非常に立派な教育を受けて育ちました。ある時、彼は同じイスラエル人がエジプト人のもとで苦しい働きをさせられているのを見ました。一人のエジプト人が、イスラエル人を鞭(むち)か棒(ぼう)のようなもので叩いて、いじめていたのです。もし、みんなの友だちがいじめられていたらどうしますか？そのままにしておかないでしょう。モーセは、すぐにイスラエル人を助けましたが、そのエジプト人を殺してしまつたのです。それを知つたパロは怒り、モーセを殺そうとしますが、モーセは荒野に逃げました。彼はそこで結婚をし、約40年間、羊飼いをしながら過ごしました。

ある時、羊を追つて行くと、神の山ホレブに來ました。そこでモーセは不思議なものを目にします。柴が燃えているのに、燃え尽きないのです。モーセが近づいてみると、「モーセよ、モーセよ」と主の声がしました。その場所で主は、エジプトの奴隸となっていたイスラエル人を救い出

すリーダーとして、モーセを選ばれたのです。

### 神様はあなたを選ばれている

今朝、皆さんに是非、知って欲しいことがあります。それは、モーセを選ばれた同じ神様が、皆さんを特別に選んでくださっておられるということです。「そんなこと言われても、別に選ばれている気がしないよ」という人もいるかも知れません。でも、神様は皆さんを選んでおられます。だからこそ皆さんは、今日の教会学校に来て、このお話を聞くことができますのです。

神様は、どうして皆さんを選ばれたかわかりますか。それは、神様の素晴らしい働きのために必要だからです。その働きは、自分勝手なことばかりしている人や寂しく過ごしている人なども心から愛するためです。そして、そのような人たちにイエス様を紹介し、神様の愛を知らせることです。

### 神様はあなたと共にある

モーセが神様から選ばれた時、彼は「神様、どうしてわたしがいすラエル人を救わなければならないのですか」と断りました。

皆さんはどうですか。「わたしは、いじわるな友だちに優しくすることはできません」、「僕は友だちにイエス様を

紹介する勇気がありません」と、モーセのように神様からの選びを断りますか？

モーセはいつたん断りました。でも神様はあきらめませんでした。続いて、神様はモーセにとっても素晴らしい約束をされました。それは「わたしは必ずあなたと共にいる。これが、わたしのあなたをつかわしたしるしである」と言われたのです。神様は、モーセを一人で神様の働きに遣わすのではなく「わたしがいつも共にいる」と約束されたのです。その約束どおり神様はモーセと共におられて、その働きを祝福されました。

神様は、「わたしは必ずあなたと共にいる」と皆さんにも約束してくださっておられます。何と素晴らしい約束でしょうか。神様が共にいてくださるなら、たとえ私たちに力がなくても、悲しいことがあったとしても、与えてくださった働きを喜んで行う者にされるのです。

### まとめ

是非、信じてください。神様があなたを選ばれ、共にいてくださるのだということを！

♪主がわたしの手を♪

(ホーリネス子どもさんびか 89)

# 聖書 出エジプト12・1～14

## テーマ 過ぎ越しの恵み

### 序論

(金井信生)

主がエジプトに下された十の災いの最後は、どんな身分の家庭も、また家畜も含めて、ういご（初子）が一晩のうちにみな死んでしまうというものでした。その結果、パロはついにイスラエル人を自由にしました。この出来事は、キリストの十字架によって罪と死の力から救われる予表です。

### 一、救いの時

これまでの災いを通して示されてきたように、主は災いを通してご自身の存在と力をあらわされました。人間が時におごり高ぶって何でもできるように思うことがあります。自然の力や社会の波を通して、無力さを知り、本当に確かなものや頼ることのできるお方を求めます。主がここで下された災いも、滅ぼすことが目的ではなく、主の声に聞き従う民を起こすためです。

最後の災いも、起ころうとする出来事と共に、どうす

ればまぬかれることができるかを主は示されます。同じ出来事が、主を畏れ<sup>おそ</sup>ない者にとつては裁きの日、恐怖の日となり、主に従う者には救いの日となるのです。

かつて台風は突然来るものでしたが、今は予報が出ます。外れることもあります。知らされている方が幸いです。主の言葉は必ずその通りになるのですから、聞き従わなければ、自分から被害を受けることになります。

### 二、救いの条件

最後の災いは「主の過越」と呼ばれています。エジプトのすべてのういごを打たれた主が、イスラエルの民の家だけは、害を与えずに通り過ぎられました。その区別は、家の中をのぞいたからでも、人の心を調べたからでもなく、家の入口の二つの柱とかもいに血が塗られているかどうかだけでした。

家ごとに小羊が殺され、その血が戸口に塗られていきます。自分たちが守られるために、代わって犠牲となった小羊によって救いがもたらされました。この一切は、主が示されたとおりに行ったからです。

出エジプトの際は、ういごだけが死ぬという災いでし

たが、私たち誰もが、最後は死ぬことにおいて、最大の災いを逃れることはできません。しかし、死ぬことに對しても、主が約束された条件を守り行えば救われます。罪を悔い改めてイエス・キリストの十字架の死を自分の罪のためと信じ、受け入れれば、私たちは死の恐れから解放されて、主に守られて生きる恵みをいただくことができるのです。

### 三、キリストの救い

小羊の犠牲によつて、イスラエルの民は救われました。新約聖書は、イエス・キリストを「神の小羊」と繰り返し伝えていきます。洗礼者ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ1・29）と弟子に証します。ペテロは「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血」（1ペテロ1・19）によつて、わたしたちはあがない出されたと記します。何よりもイエス自ら十字架にかけられる前の晩に弟子たちと食事を共にされ、ぶどう酒を「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である」（ルカ22・20）と宣言して渡されました。

私たちはきよい神の前に、本来ならば罪ある者、裁かれるべき者でした。しかし、神の独り子であり、全く罪のないイエス・キリストが、私を愛し、私の代わりに、命を差し出し死んでくださいました。私たちは、自分で用意した小羊ではなく、神が備えられた清い御子キリストの血によつて、罪が赦され、救われました。キリストによる罪の赦しとは、神の前に、キリストの義が私の義となったことです。神は、イエス・キリストを信じ受け入れた私を前にして、〈わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであらう。：あなたがたを滅ぼすこととはないであらう〉と宣言してくださるのです。

イスラエルの民は、今に至るまで毎年、この過越しを記念する祭りを行っています。私たちはそれ以上に日々イエス様の十字架の救いを喜び感謝し、「キリストによつて私は救われました」と、大胆に主の前に近づき、御名をほめたたえて歩みましょう。

### 結論

キリストの血により罪赦されたことを感謝し、神の裁きから守られていることを喜びましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

この出来事はイスラエルの歴史においても、後のキリストによる救いの型を示している点においても非常に重要である。

## テキスト

2 この月をあなたがたの初めの月とし この出来事はイスラエルの歴史において非常に重要なものであったので、特別に霊的な意味において「初めの月」とする必要があるが(エジプト暦では第十か第十一の月となる)、過越と出エジプトという重大な出来事を記念して、この日がイスラエルのために特別な意味を持つようになった。この時以来、イスラエル人は宗教暦と民事暦の二つの暦を用いるようになった。この月はまた「アビブの月」とも呼ばれる(出エジプト13・4、申命記16・1)。「アビブ」とは「穀物の穂」を意味し、この月はちょうど穀物が穂を出す頃で、太陽暦の4月頃に相当する。バビロニア捕囚の後、この月はバビロニアの習慣に従って「ニサンの月」と呼ばれるようになった。

た(ネヘミヤ2・1、エステル3・7)。

3 全会衆(ヘ)コル・エーダー イスラエルを表す宗教的用語。新共同訳は「共同体全体」と訳している。エーダーはカーハールと共に、新約における教会(キ)エクレーシアのもととなった用語。小羊(ヘセ) は羊または山羊の両者に用いることができる。それゆえ5節では「羊または山羊のうちから、これを取らなければならない」と説明されている。

4 おのおの食べるところに応じて 後代になると、一頭の山羊を食べる人の数は10人と定められるようになった。これはユダヤ教による人工的规定であって、実際にはそれぞれが食べられる分量に応じて人数と分量を定めればよかった。

5 傷のない(ヘターミーム) この語はレビ記の祭儀律法の中で多く用いられており、身体に欠陥のないことを意味する。また、人についても用いられ、「全き人」、「全き者」と訳されている(創世記6・9、17・1)。この場合には「神に全く従う」という意味に用いられる。過越の小羊はキリストの型で(1コリント5・7)、傷のない、完全無罪のキリストがその血を流されたことによって贖い(あがな)が

完成した。

7 その血を取り、…塗らなければならない この血を塗る行為は、ヒソプの束を用いて行われた(22節)。ヒソプはきよめの行事に関連してのみ用いられる(レビ14・49、52)ので、この行為は、きよめと贖いの儀式に関連している。

8、10 ここは食事について具体的に指示されている。火に焼いて食べ 生で食べることや、水で煮て食べることが禁じられている。生で食べることは、当時、そのような古代の風習が残っていたか、あるいは異邦人の魔術的な行為の中にこうした風習が残っていたことを示しているのかもしれない。水で煮ることを禁じているのは、イスラエルの各家庭には羊一頭を丸ごと煮ることの出来る大釜はなかった。だから、煮るために動物の体を小さく切ってしまうことがないようにという配慮だったかもしれない(46節)。過越しの時に一つのパンから食するように(1コリント10・17)、小羊もその体のまま食卓に供された。それは主にある者が一つ心になって交わることができるようになるための象徴的な行為である。種入れぬパン パン種を入れたパンは腐敗しやすかった。それは道徳的腐敗を象徴しており、

悪意と邪悪の型でもあったので(1コリント5・8)、さげ物のためのパンはパン種を入れて作ることが禁じられた。苦菜 エジプトにおける苦難を表したもの。「ミシユナー(ユダヤ教の中で最も初期に成文化された口伝承)」には苦菜にする草として、チシャ(レタス)、キクチシャ(チコリー)、コシヨウグサ、ヘビノネ、タンポポの5種類が挙げられている。

11 腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない いつでも出立できる身なりをして食するということで、緊迫した雰囲気がよく表されている。後代になると、自由の民であることを表すため、ゆつくりした雰囲気の中で食するようになった。過越(ヘサハ) 文字通りには「跳躍する、飛び越す」を意味し、ここから「通り越す、容赦する」という意味をもつようになった。

13 その血は…しるしとなり 家の入口とかもいに塗った血が、神のさばきを免れるしるしとなったように、私たちも神と人の前にキリストの血に対する信仰を言い表わす時に救われる。

参考図書 7月8日分と同じ

## 聖書

出エジプト12・1～14

## タイトル

神様に守られて

## 暗唱聖句

わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであらう。

## 目標

出エジプト12・13  
キリストの血により罪赦され、神の裁きから守られる者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

「あんなひどいこと言ってごめんね」、「いいよ。もう気にしていないから。これから仲良くやろうね」。皆さんは、仲良しの友だちとけんかしたことがあるでしょう。仲が悪くなると何だか学校に行くのも嫌になります。でも、素直に友だちに謝って赦してもらえると嬉しいですよ。皆さんは、自分が悪かったことを赦してもらったことってありますか。人を愛するとは、人を赦すことです。今日、神様が皆さんをどんなに愛してくださっているかが分かります。

## 苦しむイスラエル

イスラエルの民は、神様から特別に選ばれた民でした。神様はイスラエルを祝福され、どんどん人数が増えて行きまし

た。でも、彼らは長い間、エジプトで奴隷とされていました。ジリジリと太陽の照りつける中で、イスラエルの人々は皆、レンガ作りの強制労働をさせられていたのです。奴隷とは、誰かに支配されていて自由がなく、苦しみの中にある人です。皆さんは、誰かの奴隷にされて苦しんではいませんか。でも、罪の奴隷になっていないでしょうか。自分では「心の優しい人になりたい」とか、「悪いことはしない」と思っているけれども、心の中ではいつも誰かの文句を言ったり、実際に友だちと一緒に悪事をしたりしていませんか。自分ではしたくない悪いことをしているとすれば、それは罪の奴隷になっているのです。

## 救われたイスラエル

奴隷とされて苦しんでいるイエスラルの民を、神様は見放してはおられません。イスラエルの民を救うため、まずモーセというリーダーを選びました。そしてモーセはエジプトの王パロの所に行つて、「私たちをこのエジプトから出してください」と願い出ます。でも、パロはそう簡単に許してくれませんでした。パロはそれを聞いて、ますますイスラエルを苦しめるようになったのです。そんな中、神様はエジプトに対して、モーセを通じ、いなごやかえるの大群、病気など

の災いを九回も与えました。それでも、パロは強情でイスラエルをエジプトから出しませんでした。最終的に神様は一つのことをモーセに示されました。

神様はモーセに、「真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に行きます。その時、国中のういごや家畜のういごもみな死ぬであろう」と、大きな災いが起こることを伝えられました。

もしこのままだと、イスラエルの人々までも災いに会い、死んでしまいます。でも、神様は、ちゃんとその逃げ道を示されたのです。それが「過越」と言われるものです。イスラエルの人々は、神様の言われるものを食べ、そして小羊の血を家の入口の二つの柱と、かもしに塗る必要があります。そうすれば主の使いは、その血を見てその家に災いを与えることなく過ぎ越すと約束されたのです。神様が言われた災いが現実になりました。そして、パロのういごも含めてエジプトの国のういごがすべて死んだのです。国中に悲しみの叫び声が響き渡りました。でも、神様の約束を実行したイスラエルの人たちだけは、災いから守られ、救われたのです。そして、その後エジプトから脱出することができました。

### 守ってくださる神様

神様は、罪を嫌い、裁かれるお方です。もし、皆さんが罪

の奴隷のままにいるなら、エジプト人が神様の災いに打たれたように、神様の裁きを受けなければなりません。でも、その裁きから守られ、救われる方法があります。それがイエス様の十字架であり、イエス様の血です。皆さんが罪を悔い改め、イエス様を救い主と信じるなら、神様は、裁きを過ぎ越してくださいます。

龍二君は、以前、電車の運賃をごまかしたことがありました。ある時、聖書のお話を聞いてみると、「皆さんには、告白していない罪、赦されていない罪はありませんか。神様はご存知ですよ」と教会会学校の先生に言われたのです。すると、あの時のことを思い出したのです。龍二君の心は重くなりました。そして、イエス様に正直に罪を悔い改め、イエス様により赦して頂きました。すると、龍二君の心は重苦しさから脱出できたのです。

### まとめ

神様は、愛するあなたを罪による裁きから守りたいと、イエス様を与えてくださいました。イエス様を信じて、神様の大きな愛で守って頂きましょう。

♪両手いっぱいいの愛♪

(ホ・子どもさんびか 146)

# 聖書 出エジプト14・10～29 テーマ 危機の中での救い

## 序論

(金井信生)

主がパロの心を碎かれて、意気揚々とエジプトを出発したイスラエルの民でしたが、たちまちその心はくじけてしまいました。またもパロが心を変えて、全軍をもってイスラエルの民を追わせたからです。しかし、すべては主のはからいでした。

## 一、海に導かれた主

エジプトの大軍が後を追ってきたことに気づいたとき、イスラエルの目の前には海が広がっており、逃げ場はありませんでした。この場所はエジプトからカナンへの地に向かう最短コースではありません。イスラエルの人々は、主が導かれる道に進んできました。昼は雲の柱が現れ、夜は火の柱によって進みました。

つまり、海辺に導かれたことも、エジプトの大軍が後を追うことも、すべて主の計画の中にあつたのです。しかし、イスラエルの人々は、主への信頼をすぐに失ってしまいました。これまでも数々の不思議をもって守られ、

救い出されてきたのに、ピンチに陥るとすぐに視野が狭くなり、恵みの記憶を失ってしまう私たちの姿そのものです。

人々の《荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかったのです》と叫ぶ声に、モーセは《あなたがたは恐れてはならない。かたく立って、主がきよう、あなたがたのためになされる救を見なさい。主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい》と答えました。背後の敵でも目の前の海でもなく、上を仰ぐ信仰に導く言葉です。

## 二、海を分けられた主

主はモーセに、《あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい》と命じられました。モーセがその通りにすると、強い東風によって海の水は左右に分かれ、イスラエルの民は向こう岸に渡ることができました。そしてモーセが再び手を伸べると、水は戻り、追ってきたエジプトの軍勢を飲み込んでしまいました。

このくだりを見ると、主は大きな奇跡をおこなわれる一方、細かなところにも行き届いておられます。モーセ

になすべきこと、これから起こることを語られることは、すべてが主の御手に治められていることを示すためです。またこれまで先頭に立ってきた雲の柱は後ろに回って、エジプトの軍勢がイスラエルの人々に近づけないように守っていました。さらに、海の中にできた道を、イスラエルの人々は自分の足で前進しなければなりませんでした。

私たちも救われた生涯を歩み続ける者です。その時に主の恵みを注意深く見出していくときに、足取りは確かになります。また私たちに与えられている力を主の導きの中で用いていくことも必要です。

「救われた。：見た。：見た。：信じた」(30～31)とあるように、主の救いをしっかりと見て、はつきり信じる者となるよう導かれているのです。

### 三、紅海を二つに分けられた者に感謝せよ

詩編136編は、主の創造と救いのみわざをたたえる賛美です。一つ一つの御業をたたえるだけでなく、「そのいつくしみは絶えることがない」と、今も私たちの上に変わることはない主の力と恵みが注がれていることをほめたたえています。

私たちは、この旧約の賛美に加えて、主イエス・キリストによる救いの恵みを感謝する者です。主が命じられると海の水が分かれ、道が開かれました。同じように主イエスが命じられると、墓の石が取りのけられて、死んだラザロが生き返って出てきます。そして主イエスご自身が十字架上で「すべてが終わった」と叫ばれると、私たちを苦しめ、縛り付けていた罪の鎖は解け、罪が赦されて永遠の命への道が開かれました。

時に行き詰まりをおぼえるときもあるでしょう。しかし主はあえてそこに私たちを導かれ、そこで主を仰ぎ、もう一度信仰に立ち帰らせようとしておられるのかもしれない。

いつも主を仰ぎ、すでに完成しているキリストの救いをほめたたえながら、どこに導かれても救いの道があることを喜びましょう。

### 結論

危機があります。しかし危機もまた神の救いの御計画の中にあり、私たちが神の守りと助けを経験し、なお主を賛美し、信頼して従う幸いに導くものであることをおぼえよう。

## 研究資料

(小平徳行)

背後に迫るエジプト軍と前方に立ちはだかる海に挟まれて、イスラエルは絶望的な状況に追い込まれた。しかし、これは神がご自身の栄光を表すために、許されたことであつた(8節)。危機は神の恵みと御力の表される機会である。

## テキスト

10〜12 パロが近寄った時：非常に恐れた パロの軍隊を見た時のイスラエルの反応は、非常な恐れであつた。11〜12節にはイスラエルの人々が陥つたパニック状態と絶望感を表している。「荒野で死なせるために、わたしたちを携え出した」とあるが、不信仰は常に神に照らして困難を解釈するのでなく、困難に照らして神を解釈するように誘う。この時イスラエルは、直前に過越を経験していたにもかかわらず、現実の状況だけによって霊的状态が左右されていた。彼らがどのような中から救われたのか、神が過去にどのようなみわざをなしてくださったのかという歴史的な考察に欠け、さらには神は何をなしてくださるかという神への深い信頼に基づく信仰も欠けていたのである。このよう

な状態では、信仰は現在の状況に容易に動揺させられてしまう。困難が私たちの心と主との間に入り込む時にはいつでも、主のご臨在を楽しむことができず、自分の困難の前に苦しんでしまうのである。信仰は、困難の背後に神がいますことを認め、神が真実さ、愛、力のすべてをもって共におられる事を知ることである。

13 かく立つて 試練に会つた時に信仰が最初にとる態度である。新共同訳では「落着いて」。イスラエルの狼狽に対してモーセの確信の姿は際立つている。彼は主がイスラエルを救われる事を確信していた。救を見なさい 救いとは神によつて完成され、啓示されたものであり、私たちが見て、喜ぶべきものである。

14 主があなたがたのために戦われる 申命記において繰り返し語られている(申命記1・30、3・22、20・4)。そこに常に言われているのは「恐れてはならない」ということである。恐れず主に信頼して進む時、主は私たちのために戦ってくださる。黙していなさい 信仰生活の大切な要素は、主に信頼し、主の前に静まり、耐え忍んで主を待ち望むことである。

15 あなたはなぜ、わたしにむかつて叫ぶのか 叫びの内

容は記されていないが、モーセ自身の中にも動揺があったことを示しているのかもしれない。彼らを進み行かせない恐れに満ちた祈りをやめ、信仰によって前進すべき時であった。

16 前進せよという命令と同時に恵みによる助けも来た。神の御手は、私たちが第一歩を踏むために道を開いてくたさる。

19 神の使 実際に人々の目に見えたかどうかかわからないが、雲の柱が彼らの前から移って彼らの後ろに行つたことよって表された。超自然的でありつつ、人格的な臨在によつて神はイスラエルを守られた。

20 そこに雲とやみがあり 新改訳では「それは真つ暗な雲であつたので」、新共同訳では「真つ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた」となっている。直訳すれば「そこに雲があり、暗やみがあつて夜を照らした」となる。通常、雲の柱は昼のためで、夜は火の柱となるが（出エジプト13・21）、この日の夜は火の柱ではなく、光のない雲の柱がイスラエルの後方に移り、エジプト軍との間をふさいだ。この柱はエジプト軍には暗やみをもたらしたが、イスラエルには光であつた。

21 強い東風 東風は強風の代名詞であろう。これは超自然的な風であり、東から吹いてきたわけではないと主張する人もいる（J・Jデーヴィス）。この風の結果、海は陸地となるが、22節のように水が「右と左にかきとつた」現象を説明することは難しい。さらに、このように海の水を二分するほどの強風の中をイスラエルの人々が行進することができたというのは不思議なことである。

24 暁の更あけぼの 「朝の見張りのころ」（新改訳、新共同訳）。夜を三更に分けた場合、これは2〜6時に当たる。

25 輪をきしらせて 新改訳、新共同訳では「車輪をはずし」となっており、こちらの方がヘブル語の原意を伝えている。主が彼らのためにエジプトびとと戦う エジプトの兵士たちは、ここで起きた出来事の中に、神の力を認めた。

26〜28 エジプト軍は、イスラエルの人々の進んだ道を歩むことはできなかった。神がご自身の民に歩むように命じておられる道は、肉では決して歩めない道である（Iコリント15・50）。信仰のみが私たちに神の道を歩ましめるのである。

参考図書 7月8日分の他、C・Hマッキントシ『出エジプト記講義』（伝道出版社）

## 聖書

出エジプト14・10～29

## タイトル

神様、助けてください！

## 暗唱聖句

かたく立つて、主がきよう、あなたが

たのためになされる救を見なさい。出

エジプト14・13

## 目標

危機の中で、信仰によって神の助けを  
求める。

## 導入

(飯田勝彦)

「あゝあ、どうしようかな」と、皆さんは今、何か悩んでいることや困っていることは、ありませんか。毎日を過ごしている、思いがけないことがたくさん起こります。そんな時、心が暗くなり、ため息をついたり、何もやる気が起こらなくなったりすることがあります。元気な時やすべてがうまく行っている時には、神様のことを思っている、苦しむと逆に神様のことを忘れてしまうことがあります。ありませんか？イスラエルの人たちもそうでした。

## もう、ダメだ！

イスラエルの民は、奴隸として苦しめられていたエジプトから脱出することができました。神様は、そのために過

越しという素晴らしい御業をされましたね。エジプトを脱出したイスラエルは、躍り上がって喜びたいほど嬉しかったに違いありません。彼らはモーセをリーダーとして神様の約束されたカナンの地を目指して進んで行きました。

そして、主がモーセに言われた場所で宿営したのです。

そこは海に面したところでした。イスラエルの民は、急いでエジプトから出て来たので、ここで一息入れることが出来たでしょう。すると「ドォー！」という地響きが聞こえて来ました。「何だ何だ、地震か」と思い、ふと後ろを振り向くと、何とエジプト軍が追いかけて来ていたのです。びつくりしたイスラエルの民は、逃げようと思いますが、前は海で行き止まりです。「もうダメだ！」と皆が思ったでしょう。皆さんも、今までに「もうダメ」と落ち込んだり、あきらめたりしたことがありますか。私たちの生活にはこのようなことが何回も起こります。でも大丈夫です。神様は不思議なように皆さんを守ってくださいます。

## 神様は、助けてくださる！

絶体絶命の中、イスラエルが言った言葉は「神様助けて！」ではありませんでした。彼らは、神様に対する思いをモーセに対してぶつけました。それは不平不満でした。「エジ

プトには、俺たちの墓がないから、あえてここで死なせるために、エジプトから連れ出したのですか？」皆さんなら何て言いますか？

イスラエルは、エジプトでも災いから何度も守られて来ました。そして、いつも雲の柱や火の柱によって、神様が共にいることを知っていました。それなのに、いざという時、神様に助けを求めることができなかったのです。

でも、民の不満を聞いたモーセは、さすが神様から召されたリーダーです。慌てることなく、「落ち着きなさい。今日、神様は必ずあなたたちを救ってくださる！」と言いました。モーセは、「神様は、助けてくださる！」と確信していたのです。

### 神様、感謝します！

絶体絶命の中、神様はどのようにイスラエルを助けてくださったでしょうか。神様はモーセに「杖を上げ、手を海に向かって差し伸べると海が分かれ、そこを渡ることができると言われました。「えっ、そんなこと!？」と思うでしょう。でも、モーセは神様の言葉を信じて実践しました。するとどうでしょう。「ゴォー」と強い風が吹き始め、海は2つに分かれたのです。そして、イスラエルは皆、分

かれた海を渡り、向こう岸に着くことができました。エジプト軍も、後を追って海を渡り始めました。しかしモーセがもう一度、手を海に差し伸べたところ、海の水はもとに戻り、エジプト軍はみなおぼれ死んでしまったのです。イスラエルの民は、絶体絶命のところで救われました。民はモーセが言った通りに神の助けを体験したのです。

このことによって、民は主を恐れ、主とモーセを信じるようになりました。そして感謝の歌を神様にささげました。

### まとめ

イスラエルをあざやかに救われた神様は、皆さんと共におられる神様です。そして、どんな時にも神様は皆さんを助けてくださいます。それは、私たちが考えられないような方法でなされる場合もあります。ですから、もし苦しいことがあれば神様を信じ、「神様、助けてください」と叫んでください。その叫びは、必ず「神様、助けてくださり感謝します！」に変えられます。

♪歌いつづけよう 主のあいを♪

(ホーリネス子どもさんびか 77)

聖書 民数記13・25・14・10  
テーマ テーマ 信仰による前進

## 序論

(福井文彦)

民数記13・14章には、イスラエルの民が荒野の旅を続け、約束の地の南端を望むカデシに来たときに、つまずいたことが記されています。彼らは十二部族を代表する斥候を約束の地に遣わします。ところがその報告に対して恐れをなして、不信仰、不従順になり、十一日間を着くはずの旅が、実際には四十年の流浪の旅となってしまうのです。

## 一、神の約束よりも自分の判断を優先した

パランの荒野で、神はモーセにカナン<sup>セツラ</sup>の地を探るために、十二部族のそれぞれから代表一人を斥候として選ぶように命じられました。

四十日後、彼らはその地を探り終えて帰り、報告します。そして、カレブとヨシユアが「わたしたちは必ず勝つことができます」と勧めました。しかし、彼らと共に約束の地を探り帰って来た他の十人の斥候たちは、それを

打ち消します。「わたしたちはその民のところへ攻めようぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」と強く反対し、さらにイスラエルの人々に悪く言いふらしたのです。

この報告を聞いたイスラエルの民は、目の前が真暗になるような思いとなり、つぶやき嘆いたのです。そして、神が「乳と蜜の流れている地」を与えるとの約束を信じないで、彼らの判断を優先したのです。そうではなく、モーセが「上つて行つて、これを自分のものとしなさい。恐れてはならない。おののいてはならない」(申命記1・21)と告げたように、神の約束を信じ従うべきでした。

## 二、神の言葉よりも人の言葉に従った

神はイスラエルの民をエジプトから解放し、紅海を開いて道を設けられました。荒野の旅では昼は雲の柱、夜は火の柱をもって民を導かれました。ですから、イスラエルの民たちは、この時までに神の言葉の権威を経験していたはずですが、

その民たちのところに、四十日の間、約束の地を偵察した斥候たちが帰って来ました。そして、カレブとヨシユアを除く十人の斥候たちが次のように報告します。(し

かし、その地に住む民は強く、その町々は堅固で非常に大きく、わたしたちはそこにアナクの子孫がいるのを見ました。またネゲブの地には、アマレクびとが住み、・・・わたしたちはまたそこで、ネプリムから出たアナクの子孫ネプリムを見ました。わたしたちには自分が、いながらのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」。

この報告を聞いたイスラエルの民は、神の言葉よりも人の言葉を信じたのです。その理由は、彼らには十人の斥候の報告した現実の方が神よりも大きく、強く見えたからです。しかし、このとき、民はイスラエルの民を導かれた神に目を向けて、み言葉を信じ、神に従うべきでした。

### 三、過去の恵みを思い起させ

カレブとヨシユア以外の十人の斥候の報告を聞いたイスラエルの民はみな声をあげて叫び、かつ泣き明かし、指導者モーセとアロンに向かってつぶやいたのです。

「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。∴、エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか」。なんと

う忘恩でしょうか。過去に神がなしてくださった数々の恵みをすっかり忘れ、不信仰になっていたのです。

彼らの心に不信仰が生じたならば、神が今までに何をなしてくださったかを回顧すべきでした。神は、多くの民族の中からイスラエルを選んで聖別し、その歴史の中で特別の保護を加え、今にいたるまでいっさいの必要を満たし続けてくださった、共におられるお方なのですから。

そこで、ヨシユアとカレブは衣服を裂き、全会衆に言いました。「もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行つて、それをわたしたちにくださるでしょう」。《主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません》。神は御名のために、決して約束を反故にされるお方ではないのです。

### 結論

新約の特選の民とされた私たちはカデシの失敗を繰り返してはいけません。たとえ今、神の御心が理解できないときでも、自らの判断を優先するのではなく、神のみ言葉の約束を信じ、共におられる神を信頼して、従い進む者でありましょう。

## 研究資料

(金井由嗣)

民数記1～10章で神の民のアイデンティティが確立され、礼拝と奉仕の組織が与えられて、いよいよ約束の地に入る準備が整った。ところが、11章以下には神が立てられた指導者に対する民の不満と反抗が繰り返し記述され、ついに本日箇所において不信仰・不従順な民に対して荒野で40年の放浪を課する神の宣告が下される。形式が整っても内面の信仰と従順が伴わない神の民は、神から託された使命を果たすことができない。

## テキスト

**13・2 わたしがイスラエルの人々に与えるカナンの地**  
神はモーセに斥候派遣を命じるが、それは進入の成否を検討するためではない。その地をイスラエルに与えることは、すでに決定済みのこととして語られている。しかし彼らは敵の強弱を論じて成否の判断を自らが下そうとした。彼らの結論以前に、神の約束よりも自らの判断を優先する姿勢が、まず問題とされなければならない。

**つかさたる者ひとりずつを** 斥候に選ばれたのは、各部族の指導的立場にある人々であった。カナンの地に入っ

た後の戦闘と定住を指導するための備えも意図されていたであろう。それだけに、民に対する彼らの影響力も大きかった。

**3 パランの荒野** 本日の箇所には、地名が頻出する。聖書地図や聖書辞典を参照し、おおその土地感覚をつかんでおくことは釈義のため有益である。パランはシナイ半島東部の広大な荒野。大群衆を収容するには便利だが荒涼とした殺風景な土地(申命記1・19)で、長期間滞在するには不向きだった。

**16 ヌンの子ホセアをヨシユアと名づけた** 同じ語源だが、ホセアは「救い」、ヨシユアは「主は救い」の意である。派遣にあたって特にこの名前を与えたことは、主に対するヨシユアのまっすぐな信仰を認め、励ます意図があったと思われる。

**17 ネゲブ** パレスティナ南部地方の総称。この時点では、シナイ半島からネゲブにまっすぐ進入する経路が想定されていた。

**20 ぶどうの熟し始める季節** 産物を持ち帰ることには神が与えられた地の豊かさを民にアピールし、カナン進入を勢いづける意図もあったかもしれない。主がモーセ

に下された命令は「カナンの地を探らせよ」であり、具体的に何をどのように探るかハモーセに任されていた。17、20節のモーセの指令は、神の命令を彼なりに真剣に解釈し、適用した結果なのであろう。その中で敵の強弱・大小について調べるよう命じたことが民を怖<sup>おそ</sup>気づかせる結果になることまでは、彼には予想できていなかった。

**22 ヘブロン** パレスティナ南部山岳地帯最大の都市。エジプトの著名な都市ゾアン（ツォアン、現在のタニス）よりも古い都市であることが特記される。都市成立の自然条件を備えた、重要な土地であったことを示している。

**23、24 エシコル** ヘブル語で「房」の意。ヘブロン近辺の谷のひとつであろう。この地域は現在でも、葡萄<sup>ぶどう</sup>の産地として知られる。

**28 アナクの子孫** 伝説的人物アナクを始祖とする諸民族の総称。体格が良いことで知られていた（申命記2・10など）。

**29 アマレクびと・ヘテびと、エフスびと、アモリびと・カナンびと** 当時、カナンの地に居住していた諸民族のリスト。さまざまな民族がそれぞれのコロニーを作って

混在している状況は、紀元前二千年紀後半のこの地の状況によく適合している。「ヘテびと」は紀元前16世紀から13世紀にかけて、現在の小アジアを拠点に東地中海地方で覇権を振るつたヒッタイト民族のこと。パレスティナにもその民族の小拠点があったのだろう。「カナンびと」は、後にはツロ・シドンの海岸地域を拠点に東地中海を支配する海洋民族として発展し、フェニキア人として歴史に名を残している。

**31 彼らはわたしたちよりも強いからです**

**14・8 もし、主が良しとされるならば** 12人の意見は、侵攻を不可とする多数派の10人と断固攻め込むことを主張するヨシユアとカレブの二人とに分かれる。前者の根拠は軍事的能力分析であり、後者の根拠は主の約束である。基準が根本的に異なるために議論は成り立たず、多数派は暴力によって二人を黙らせようとする。

**10 そのとき、主の栄光が・・現れた** 人間的な判断基準によつて神の約束をないがしろにする人々に対して、神はご自信の栄光を現して裁きをなされる。

**参考図書** 『新聖書辞典』、K・A・キッチン『古代オリエントと旧約聖書』、Keil & Delitsch

## 聖書

民数記13・25～14・10

## タイトル

神様がいつしよだ、さあ、前進！

## 暗唱聖句

主がわたしたちと共におられますから、  
彼らを恐れてはなりません。

民数記14・9

## 目標

共におられる神に信頼して、神に従い  
進む者となる。

## 導入

(和田 治)

「たいち君、ぼくといっしょに教会学校へ行こうよ！」しげる君は毎週教会学校にかよう3年生。大好きなお友達のたいち君に何度声をかけようと思ったことか…。神様がお喜びくださるってわかっているのに、つい、「断られたら、やだなく」とか、「変なやつって思われちゃうかも」とか考えて、勇気が出ません。みんなは、心配や恐れが邪魔をして、神様に従えないってこと、ありませんか？

今日は、「神様が一緒だから怖がることはない、従っていけるよ！」っていうお話です。

## 同じところに行ってきたのに・・・

神様はモーセにお命じになりました。「いずれはおまえたちの

ものになるカナンの国に、まずスパイを送り込みなさい」。そこで、十二部族のリーダー十二人が四十日間、カナンの国の様子を見てきたのです。さすが、神様がご用意くださったっていた約束の国！とっても豊かな土地で、そのブドウは、二人の男の人がさおで担がないと持つことができないほど、豊かに実を結んでいたのです。さあ、どんな報告でしょうか？「カナンは本当にすばらしい国です。まさに『乳と蜜が流れる』地ですよ。その証拠に、持ち帰ったくだものをご覧ください！」とこまでは良かったのですが、ヨシユアとカレブ以外の十人が続いてこう言ったのです。

「でも、残念ですが、あそこに住んでいる人たちはものすごく強そうで、町も大きく、高い城壁で囲まれ、巨人族までいるんですよ！」

「ええ！強そうな人たち！大きな町に巨人がいるって！」この報告に、人々はざわつきました。すると、スパイの一人だったカレブが、モーセの前で皆を静め、きっぱり言いました。「大丈夫です！すぐ攻め上つてカナンを占領しましょう。私たちは必ず勝つことができます！」と。それなのに、十人は「無理だ。あんな強い相手じゃ、かないっこない」と大反対です。そしてみんなに、カナンのことを悪く言いふらしました。「あんな国に行ったら、みんなやつつけられてしまいうに違いない！強そうな兵士ばか

りだったんだから。自分たちがイナゴみたいに思えたよ・・・」  
と。あらら、同じところを見てきたのに、言っていることはまったく逆じゃありませんか。十人の人々には神様を信じる心がないのでしょうか？

### 神様のみ言葉が人の言葉か、どっち？

さあ、みんなならどうしますか？「カレブの言う通りさ。必ず勝てるよ、だって、神様のお約束じゃないか。進もう！」って言うかな？え？イスラエルの人たちはどうだったかって？実は、「うおくん！」って泣き出したんです。一時間たつても二時間たつても泣き止みません。とうとう一晩中、泣き続けたんです！  
挙句の果てにこう言い出す始末。「なんてこった。こんなことなら、エジプトで死んでたほうがよかった。あんな国に行くくらいなら、この荒野で死んだほうがましだ。いや、逃げよう。エジプトへ帰るんだ。それしかないぞ！」

ヨシユアとカレブは叫びました。「主が導いていく、ださいます。だから、主に背いてはなりません。主が私たちと共におりますから、彼らを恐れてはなりません！」と。ところが人々は、二人の言うことを聞かず、かえって石で打ち殺そうとしたのです。なんということでしょう！神様のお言葉よりも、十人の不信仰な人たちの言葉の方を信じるなんて！

### 神様を信じて進もう！

思い出してください、先週学んだことを。絶体絶命のピンチの時、神様はどのようにイスラエルの人たちを助けてくださいましたか。「杖を上げ、手を海に向かつて差し伸べよ」っておっしゃり、海が真つ二つに分かれたのでしたね。彼らは、神様しかできないものすごい救いのみわざを、すでに見ていましたよね。なのに、それを忘れてしまつて、神様が一緒にいてくださらないかのように不信仰になつてしまつたのです。だからヨシユアやカレブの言葉も、心に届かなかつたのですね。

### まとめ

「僕は神様のものすごいわざなんて、見たことないよ」、「私には神様の御声なんて聞かえないわ」と、辛いことや怖いこと、泣きたいことが続くと、神様を信じる心が弱くなつてしまうかもしれません。でも、忘れないでください！今も神様は、聖書のみ言葉を通して、ご自身がどれほど力強いお方を示していかけています。そして、私たちの心に語りかけておられるのです。だから、人の言葉や自分の思いではなく、聖書のみ言葉、神様の御声に信頼しましょう。目に見えなくても、神様はいつでも、どこでも共におります。だから、まっすぐに神様に従い、前進しましょう！

♪雄々しくあれ♪

(新聖歌 486)

# 聖書 テーマ マタイ8・5～13 模範的信仰

## 序論

(福井文彦)

8章1～17節には三つの病のいやしの記事があります。この箇所は二つ目で、百卒長の僕のいやしです。このいやしの出来事を通して、イエスは全人類の救い主であり、権威ある主に対する信仰をもって助けを叫び求めるいかなる者をお救いくださることをお示しになったのです。

## 一、謙遜で、謙虚な百卒長

百卒長がカペナウムのイエスのみもとに来て、〈主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています〉、いやしてくださいと訴えました。並行記事(ルカ7・1～10)では、ユダヤ人の長老たちを遣わしたと記されています。しかし、百卒長は長老たちを遣わした後に、自分でもイエスのもとに行ったと思われる。

百卒長が長老を遣わしたことに、彼のイエスに対する姿勢が表われています。自分は異邦人、罪深い軍人生活をしている者、それが聖なるお方の前にぬけぬけと出て来て「ああしてください、こうしてください」などとい

うことは、とても畏れおおいと思っていたのです。

百卒長がイエスに僕の病のいやしを訴えますと、主は〈わたしが行ってなおしてあげよう〉とお答えになりました。すると、百卒長は〈主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません〉と、イエスの申し出を謙虚にお断りします。彼は、当時のユダヤ人は異邦人を汚れた者と見なして、その〈屋根の下〉、すなわち住まいに入れるだけでも汚れると考えていたことをよく知っていたからです。ここに彼の謙遜と謙虚さを見ます。

## 二、イエスの権威を認めた

百卒長はイエスのことを二度〈主よ〉と呼んでいます。これは通常の敬意以上の気持ちが入められた表現であって、少なくとも、イエスのことを神から特別の権威を授けられた人と見なしていたということです。「権威」とは、自発的に同意や服従を促すような能力や関係のことです。これは、相手の同意に関係なく、脅しや罰則などによってむりやり服従させる「権力」とは別物です。悪霊さえその「権威」を認め、従いました(マルコ1・25～27)。悪霊は不本意ながらも、この「権威」による

命令には従わざるを得ないのです。イエスの「權威」はそのようなものでした。

百卒長は、自分自身の生活・軍隊生活の中で、軍人は上官の命令に従わなければならないことをよく知っていました。彼は上官としての權威を持っていたので、部下に命令しさえすればそのとおりになりました。それと同じように、イエスがお命じになれば僕はなると彼は信じていたのです。すなわち、百卒長は、イエスは神の權威をお持ちになったお方であり、主のお言葉を信じれば、必ず治るとの信仰に堅く立っていたのです。それで、イエスに、「ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります」とお願いしたのです。

### 三、百卒長のいれほどの信仰

イエスは、異邦人である百卒長の信仰に驚嘆されました。そして、ついて来た人々に言われました、「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない」と言われました。イエスが「これほどの信仰」と言われたのは、異邦人の百卒長がイエスのお言葉の絶対的權威に対して無条件に服しているからです。

そのときイエスの目は、目の前のことを超えて、やが

て具体的に展開される神の国の栄光をはるかにご覧になっていました。そして、信仰がもたらす結果を教えられると同時に、警戒をも与えておられます。それが11〜12節です。

終わりの時の神の国での祝宴（黙示録19・9参照）には、全世界から信じる者が呼び集められるが、席に着くはずだった選民ユダヤ人は、不信仰のゆえに外に追放されます。彼らは「そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりする」ことになるのです。12節の「この国の子ら」とは神の国を相続するはずであったユダヤ人を指します。つまり、ユダヤ人だから救われ、異邦人であるから救われないというのではなく、真実な信仰を持った人が救われるということなのです（マタイ7・21参照）。

### 結論

日常生活のどんな事においても、イエスは信頼に足るお方です。百卒長は、このイエスを謙遜に絶対的に信頼したのです。私たちも単なる理解や承諾の程度にとどまらないで、また頭だけの信仰ではなく、百卒長の信仰に倣いましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

ここに描かれている、イエスの持つ至上の権威に対する百卒長の信仰は、後に「あなたがたは行つて、すべての国民を弟子として…」(28・19)と命じられる宣教のわざの、先取りの実と言えるかもしれない。イエスがもたらす神の国とは、ユダヤ人と異邦人との垣根を取り除き、「すべての国民」を招く、包括的、普遍的なものである。

## テキスト

5 カペナウム イエスのガリラヤ宣教の本拠地(4・13)。

国境に近く、主要な通商路上にあつたので、ローマの部隊が置かれていたのであろう。あるいは領主ヘロデ・アンティパスによつて雇われた部隊であつたかも知れない。百卒長百人(実際には60〜80人ほど)の部隊を統括する隊長。彼は異邦人(ローマ人とは限らない)であつた。

6 主よ 通常の敬意以上の気持が込められた表現。百卒長はイエスのことを、少なくとも、神から特別の権威を授けられた者となししていたであろう。わたしの僕 僕(ギ・パイス)は[ギ]ドウロス(僕、奴隸)と異なり、「子ども」とも訳せる語で、そちらを採る翻訳もある。「僕」と訳す

場合も、通常の主人と奴隸の関係を越えた、より親密で家族的な関係であつたことが想像される。

7 わたしが行つてなおしてあげよう ユダヤ人は異邦人との交際や、その家への出入りが禁じられていた(使徒10・28参照)。このイエスの応答には、そういった文化的、宗教的な障壁を乗り越えることをいとわない姿勢が表されている。

8 わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません いわゆる謙遜けんそんや卑下というよりは、ユダヤ人の風習をよく理解していたゆえの言葉ととる方が妥当であろう。しかしその意図は癒しいを辞退することではなかつた。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります むしろ彼は、イエスの権威、力に対する強い信頼をもつて、僕の癒しを切に求めたのである。

9 わたしも権威の下にある者ですが 自分も上司からの命令には従わねばならない者であること、また自らの権威が上位の者(皇帝など)から授けられていることを意味するのであろう。さらに、おそらくここには、イエスは誰の権威の下にもないお方であるということも暗示されているだろう。わたしの下にも兵卒がいまして… 百卒長は、部

下に対する自らの権威と、万物に対するイエスの権威とを比較している。自分の命令でさえ部下にとって絶対であるならば、まして至上の権威者であるイエスの言葉や命令に対して従わないものがあるのか、という強い信仰の表明である。

10 イエスはこれを聞いて非常に感心され イエスは異邦人であるこの百卒長の信仰の深遠さに驚かれた。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない それは、この異邦人の信仰に対する賞賛であると同時に、イスラエルの不信仰と無理解に対する嘆きであり、皮肉でもあった。

11 多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく 神の国における終末の祝宴の典型的なイメージ。それは新旧約両方において待ち望まれているものである（イザヤ25・6、マタイ22・1〜14等）。イザヤは、それが「すべての民のため」であると明言しているが、ユダヤ人はそれが自分たちだけのものであり、異邦人はせいぜいそのおこぼれにあずかる程度と考えていた。彼らにとって「東から西から」集まるのは、ディアスポラ（離散したユダヤ人）のことだったのである。しかしイエスが言うところの「東から西から」くる「多く

の人」とは、（ユダヤ人を除外するわけではないが）異邦人を中心としたすべての国民であった。

12 この国の子ら 「神の国」の相続者を指す慣用表現。

イエスは皮肉を込めて、「この国の子ら」を自認し、自称するユダヤ人を指す表現に用いた。真の「この国の子ら」は、彼らではなく、イエスの招きに応答する者たちなのである。外のやみ 明るい祝宴のイメージとは対照的な「やみ」は、終末の審判と刑罰を表す典型的な表現（22・13、25・30）。泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう悲しみや怒りというよりはむしろ、受けた不面目に対する苦悶を示す表現である。

13 あなたの信じたとおりになるように 「…とおりに」という表現は、恵みが、信仰の度合いに応じて与えられるということの意味するのではなく、信仰の「結果」として与えられることを意味する。ちょうどその時に、僕はいやされた 僕のいやしをもたらしたのがイエスの言葉以外の何ものでもないことをはっきりと示している。

参考図書 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

## 聖書

マタイ8・5〜13

## タイトル

イエス様ならできる！

ただ、お言葉を下さい。そつすれば僕はなおります。

マタイ8・8

## 目標

謙遜でありつつ、権威あるキリストへの大胆な信仰を持つて生きる。

## 導入

(和田 治)

「返してよくねえ、返してつたら！」「いや〜だね〜。これ、気に入ったから返してやらない」。ひろと君は、妹のちいちゃんの大事なカードを返そうとしません。とうとうちいちゃんは泣き出しました。とその時、「ひろと、それはちいちゃんのだよ。返してあげなさい」と、やさしいけれどきつぱりとした声が聞こえてきました。ひろと君たちには中学生の健太君というお兄ちゃんがいるんです。二人とも健太君のことが大好きでした。ひろと君は健太君に「はい」とお返事をして、素直にちいちゃんにおもちゃを返しました。

みんなも、「この人の言うことなら、素直に聞ける」っていう人がいるでしょうか。お父さん？お母さん？先生？実は、健太君がひろと君を従わせたように、人を従わせる力のことを「権威」つ

ていうんです。今日は、イエス様が持つていらつしやる権威、人を従わせる力について学びます。

## イエス様を頼った百卒長

イエス様がカペナウムの町に戻られた時、ある百卒長が訪ねてきました。百卒長っていうのは、百人ぐらいの兵隊のリーダーとしてみんなを従える隊長のことです。彼はイエス様に訴えました。「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています」。

中風というのは、腕や足がしびれて動かなくなる、痛くて辛い病気のことで。イエス様は彼におつしやいました。「わたしが行ってなおしてあげよう」。ところが百卒長は「主よ、私の家にあなた様をお入れする資格は、私にはございません」と言うのです。彼は異邦人、つまりユダヤ人ではなく、外国人でした。彼は、当時のユダヤ人が異邦人を汚れた者と見なして、家に入れるだけでも汚れると考えていたことを、よく知っていました。聖い主イエス様を、自分の家になんて、ふさわしくない…。彼には、イエス様を敬つて自分を低く扱うへりくだつた心があつたのです。

## ただお言葉をください！

百人隊長は続いて「ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります！」と言いました。ええっ!?手を置いてもらつたり、直接声をかけてもらわなくつても、離れたところからただお言葉をい

8月

12日

## 礼拝メッセージ例

ただ、僕の重い病気が治る!? そんなことってあるでしょう? でも、どうやら彼は、イエス様ならできると本気で信じているようです。だって、彼は続いてこう言っただけです。

「と申しますのは、私の下にも部下が大ぜいおります。その一人に私が『行け』と言えば行きますし、『来い』と言えば来るのですから。つまり、「私にさえ、部下に言うとおりにさせる権威があるのです。まして、主の権威で、お命じりなされば、必ず治るはずですよ」と、信じたのですね。

### あなたの信じたとおりになるように

百卒長の言葉を聞いたイエス様は、とっても感心され、みんなにこうおっしゃいました、「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない!」と。考えてみてください。イエス様の願いどおりにならないものや、イエス様がお命じになっても従わないものがあるのでしょうか。いいえ、イエス様こそ、すべてのものの上に立つ、何よりも誰よりも大きな強い権威をお持ちのお方です。その権威を信じた百卒長の信仰を、イエス様は驚きながらおほめになったのです。そして、「行け、あなたの信じたとおりになるように」と、お命じりました。すると、ちょうどその時に、僕はいやされたのです、ハレルヤ!

### 百卒長のよこ

「いいえ。百卒長やいやされた僕のように、イエス様のお言葉がもらえたらなく」と思いますか? 大丈夫! 実は私たちも、イエス様のお言葉をいただくことができるのです。わかるよね? そうです、この聖書のみ言葉こそ、すべてのものが従うべき主のお言葉なのです! こうして毎週、教会学校でみ言葉を学び、毎日、聖書日課で聖書を味わうことは、まさに、み言葉をいただくことなんです。やったね! でも、百卒長のように、イエス様のお言葉にはどんなものも従うんだって、本当に信じていますか? たとえば病気になる時、「主よ、いやしてください!」って祈りますか? もちろん病院で診ていただきますが、お薬や治療を通していやしてくださるのは主なる神様ですよ。困ったことがあつてどうしようもない時、「イエス様ならできる!」って信じてお祈りしていますか? また、聖書のみ言葉に素直に「はい」って従っているでしょうか? それが百卒長のような信仰ですよ! さあ、みんなも、百卒長のように、主のお言葉の権威を信じて、み言葉に対して「はい!」と、ますます従っていきましょう。

♪信仰はなんてすばらしい♪

(ふくいんこどもさんびか 2・25)

# 聖書 マタイ9・1～8

## テーマ 罪を赦すお方

序論

(福井文彦)

この箇所<sup>この箇所</sup>の出来事は、「中風の人のいやし」と呼ばれています。しかし、ここで真に問題にされていることは、イエスが単に病をいやすことができるだけでなく、罪を赦す<sup>ゆるす</sup>権威を持っておられることです。並行記事のマルコ2・1～12、ルカ5・17～26をも合わせ見ながら進めていきます。

### 一、罪の赦しの宣言

イエスは、カペナウムのある家で教えておられました。そこには大勢の人々が集まり、家の入り口までいつぱいになっていました。そこへ一人の中風の者が、四人に運ばれてやって来ました。ところが、戸口までも大勢の人で、イエスに近づくことができなかったのです。

そこで、家の外側から屋上に上がる階段をのぼり、屋根をはいで大きな穴をあけました。家の中にいた人々に天井から突然ばらばらと土が落ちてきました。すると、中風の者が床のまま吊り下されてきたのです。そこには、

中風の者が横たわっていて、屋根からのぞいている人たちは哀願するようにイエスを見ました。

するとイエスは〈彼らの信仰を見て〉、いきなり〈子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ〉と宣言されたのです。〈彼らの信仰〉とありますから、中風の者を運んで来た四人の人たちの信仰も含まれています。しかし、肝心なのは中風の者の信仰です。何よりも彼の信仰を見て、イエスは罪の赦しを宣言されたのです。

### 二、「冒涇」といふ批判

ところがイエスが罪の赦しの宣言をされると律法学者たちは、心の中でこうつぶやきました。〈この人は神を汚している〉と。というのは、律法学者たちは罪を赦すことができるのは神だけであると考えていたからです。彼らはイエスが神であることを認めていませんでした。ですから、神以外の者が罪を赦すなどとは、とんでもない罪だと思ったのです。

当時のユダヤ社会では、病氣はすべて罪の結果であると信じられていました。そこで病氣にかかるのは、他の人よりも罪深いからだと考えていたのです。これは、全

く聖書的ではなく（ヨハネ9・1～3参照）、イエスは、こうした因果応報的な考えを受け入れておられませんでした。

それにしても、どうしてイエスはここで罪の赦しを宣言したのでしょうか。他の病人たちにしたように、ただちに手を差し伸べて彼を立ち上げらせることをどうしてもしないのだろうと、人々は思ったことでしょう。

しかし、この箇所でも大切なことは、罪こそが人類にとつての根本問題であり、その解決のためイエスが来られたということなのです。

### 三、どちらがたやすいか

そこでイエスは「あなたの罪がゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」と質問されました。私たち人間の間では、罪が本当に赦されたかどうか、その結果はだれにも見えません。すなわち確かめようがないので、口からの出まかせであっても言うことができます。しかし、中風のいやしは、起きて歩くことによってすぐにわかります。ですから、「起きよ」とは安易に命じることではできないのです。私たち人間にとつてはこちらのほうが難しいのです。

しかし実は、病気をいやすよりも罪を赦すことのほうが、はるかに難しいのです。というのは、罪の赦しは、ただ神のみによって与えられることだからです。そして律法学者はそのことを知っていました。そこでイエスは彼らにとつて難しいと思われていた中風のいやしをなさったのです。

そこでイエスは、「人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言つて、ただちに中風の者を立ち上げさせました。立ち上がった彼は、床を自らたんで家に帰つて行きました。律法学者は、イエスの罪を赦す権威に対して言い逆らうことができませんでした。この奇跡によつて、イエスだけが罪を赦す権威を持つておられる唯一のお方であることが示されたのです。

### 結論

イエスだけが罪を赦す権威を持つておられます。そして中風の者だけでなく、だれもが罪の赦しを必要としています。イエスを信じ近づくと、中風の者のように罪が赦され、起き上がり、喜び勇んで歩む新しい人生が始まるのです。

## 研究資料

(中島啓二)

ここでの中心的な主題は、罪のゆるしの権威についてである。病を癒<sup>いやす</sup>することができるとイエスは、すべての病や苦難の根である罪を滅<sup>いやす</sup>ぼし去ることがおできになる(病と罪の関係については注意が必要であり、詳しくは後述する)。

後者、すなわち罪を滅ぼし、罪のゆるしを人に与えることがイエスの本当の使命であった。それは十字架上で達成される。十字架なくして罪のゆるしはなく、罪のゆるしなくして本当の癒しもない。イエスは罪をゆるす権威を持つ者として、神の国の到来を宣言し、本当の救いへと人を招かれたのである。

## テキスト

1 自分の町 カペナウム(4・13、8・5)。

2 人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んできた マルコやルカでは、四人の者がこの病人を運んできたこと、そして群衆のためにイエスに近寄ることができなかつたので、屋根から床ごとつりおろしたことが記されているが(マルコ2章、ルカ5章)、マタイはそれらの記述を省いて、罪のゆるしに焦点を絞っている。彼らの信

仰 イエスの癒しの力を信じて、なんとしてもみもとに行こうとした彼らの信仰。運んできた者たちだけでなく、病人本人も含まれるであろう。マタイは、詳細を省きつつも、マルコやルカが記したその行動を念頭に置いていたと考えが良いだろう。子よ [ギ]テクノンは「わたしの」子よ」という親しみを込めた呼びかけで、そこにはイエスの愛とあわれみが込められている。あなたの罪はゆるされたのだ 当時のユダヤ社会では、病は罪の結果であるという考えが蔓延<sup>まんえん</sup>していたが(ヨハネ9・2参照)、因果応報の考えは全く聖書的でない(もちろん不品行や不摂生の結果として病気になるといった因果関係は当然あり得る)。義人が病で苦しむこともあるし、逆に悪人が健康で長生きすることもあることである。それでは病と罪は何の関係もないかと言うと、そうではない。むしろ、すべての病と苦難の起源は、死そのものと同様に、罪がこの世に入ったときにさかのぼると言える。その意味に限れば、すべての病や苦難は罪の結果なのである。この箇所を中心点は、罪こそが人類にとつての最も根本的な問題だということ、そしてその解決のためにこそイエスは来られたのだと言うことである。イエスは、十字架と復活を通して、罪の一症状に過

ぎない病や苦難にだけではなく、その根本である罪そのものに對して決定的・致命的な一撃を加えたのである。

**3 神を汚している** 律法学者たちは罪をゆるすことができるのは神だけと考えていた。洗神罪は基本的には神の名の乱用に適用されたが、その延長として、神になりすます、あるいは神にしかできないことをすることも冒瀆と見なされた。彼らは、それまでの数々の出来事からイエスの神的權威に気付くべきであった。しかし形式主義に陥っていた彼らは、靈的な感性が鈍っていたのである。

**4 なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか** 律法学者たちの動機は、神の名と主權を守ろうということもあつたであろうが、それだけではなく、ご自身に對してねたみなどの悪意を抱いていることをイエスは見抜いていた。

**5 どちらがたやすいか** 人間的な視点から見ると、結果が即座にあらわれ、効果がなければそれがすぐに露呈する病の癒しよりも、いかようにも言い逃れのできる罪のゆるしの宣言の方がたやすいように思える。しかし本当の意味で難しいのは、言うまでもなく罪のゆるしの方である。

**6～7 人の子は地上で罪をゆるす權威をもっていること**

**が、あなたがたにわかるために** ここにこのみわざの目的

がはつきりと示される。人の子（ダニエル7・13～14参照）であるイエスが罪をゆるす權威を持つていることを人々に知らせることである。目に見えない罪のゆるしがそこでなされたことの証拠として、目に見える癒しのわざが行われたのである。**地上で** は「終末の到来に先がけて」の意。

イエスによつて神の国は既にもたらされ、信じる者はその前味を享受することができる。人の子として来られ、終末の祝福をこの世界にもたらし始めたイエスは、その使命のために、罪のゆるしの權威を持つておられるのである。その權威によつてイエスは、起きよ、床を取りあげて家に帰れと命じた。すると彼は起きあがり、家に歸つて行つたこの反応は、イエスの命令に即座に、そして正確に応答するものであつた。

**8 恐れ** 畏怖の念は神的な顯現に對してなされる反応（17・6、28・5）。こんな大きな權威を人にお与えになつた神をあがめた 群衆は、イエスの神性を認めるには至らないが、彼に与えられた神的權威を認め、それを与えた神をあがめたのである。

参考図書 8月12日分と同じ

## 聖書

マタイ9・1-8

## タイトル

あなたの罪は赦された？

## 暗唱聖句

子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪

はゆるされたのだ。

マタイ9・2

## 目標

あらゆる祝福に先だつて、罪の赦しの恵みを受け取る。

## 導入

(和田 治)

すみれちゃんには、高校1年生のお姉ちゃんがいます。不思議なことに、お姉ちゃんは毎日、お地蔵さんに手を合わせに行きます。『こうしてあんなに熱心にお地蔵さんに手を合わせるのかな？』ある日、すみれちゃんはそのわけを尋ねました。するとお姉ちゃんはこう答えてくれました。「実はね、去年、友達と大げんかして、その子に『ばか！死ぬ！』ってどなっちゃったの。その子はひどく傷ついて、しばらく口もきいてくれなかった。私が何度も謝って、とうとう赦してくれたの。でもね、醜い心であんなひどいことを言ってしまった自分の罪が、どうしたら赦され、心がきよくされるのかしら、と思うと苦しくてたまらないの。それで、お地蔵さんに手を合わせてお願いし続けているのよ。すみれちゃんはいました、「なら、教会学校の先生にお祈りしてもらおうよ！イ

イエスは罪を赦す力をお持ちなんだから！」お姉ちゃんは十字架と復活のお話を聞き、イエス様を信じました。罪が赦された確信が与えられ、初めて心が晴れ晴れとしたのです。良かったね！今日は、イエス様だけが持つておられる「罪を赦す力」に注目しましょう！

## あなたの罪はゆるされたのだ

イエス様はこれまで、いろんな所でたくさんの人たちの病気を治してこられました。ですから、カペナウムに帰られた時には、イエス様のもとに人々が続々と集まってきたのです。やがて数人の人が、床に寝かせたままの中風の男を運んで来ました。「必ず治していただける」と信じていたからです。イエス様はこの人たちの熱心な信仰を見て、病人に、「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われました。

「なんてことばだ！まるで、自分が神だと言っているようなもんじゃないか！」ユダヤ教の指導者のある者は、怒りで腹の中が煮えくり返る思いでした。

## どうして簡単？

イエス様は彼らの考えを見抜いて、おっしゃいました。「なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのですか。『あなたの罪はゆるされた』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、ど

「ちらが簡単だと思っているのですか？」

みんな、どう思いますか？病気で体が動かない人に「起きて歩きなさい」って言うのは、むずかしいよね。だって、本当にそうさせる力があるかどうかは、すぐに目に見えてわかりますから。

口先だけなら、「あなたの罪は赦されました」っていうのはとっても簡単、誰にでも言えます。でも、待つて！本当の意味で罪を赦すつて、いったい誰ができるのでしょうか？そうです、ほんものの神様以外には、絶対に誰にもできないのです！

### 起きよ！

続いて、イエス様は「私が確かに、罪を赦す力を持っていることが、あなたがたにわかるために」とおっしゃって、中風の者にむかつて、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ！」と言われました。もしその通りにならなかつたら、神を汚すうそつきってことですよね。でも、身動きもできず床のまま運ばれてきたこの人は、なんと、すぐに起きあがり、自分で歩き出したではありませんか！皆は本当に恐ろしくなり、そして、こんなに大きな力をお与えになった神様をほめたたえました。

### 何のために？

イエス様は何のためにこのことをされたのでしょうか。イエス様が罪を赦す力を持っている真の救い主であることを、人々に知

らせるためだったんですね。目に見えない罪の赦しがそこで実際になされたことの証拠として、目に見えるいやしのわざが行われたのでした。この奇跡によって、イエスさまだけが罪を赦す力を持つておられる唯一のお方であることがはっきりしたのです、ハレルヤ！

### まとめ

皆さんは、イエス様からどんな祝福をいただきたいでしょうか。勉強のことやお友達のことで悩んでいますか？病気がいやされたいと願っている人もいるでしょうか。願いを込めてイエス様に祈ることは幸いです。でも、何よりもあなたにとつて必要なことは、イエス様によってすべての罪を赦されることです。あなたははっきりとイエス様から「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言っていただけなのです。このことより大きな祝福は他にありません！イエス様は何の苦勞もなく私たちの罪を赦されるのでしょうか。いいえ、十字架で命を捨てて、私たちの罪の身代わりに罰を受けてくださったのです。だから、どんな罪でもお赦しくださるのですね。さあ、罪を赦す力を持つておられるたつた一人のお方に、すべての罪を赦していただくようではありませんか！

♪ハレルヤ！僕は救われた♪

(教会学校賛美歌 35)

# 聖書 マタイ9・9〜13 テーマ 罪人を招くイエス

## 序論

(福井文彦)

イエスは人々から罪人と呼ばれ嫌われていた取税人のマタイを選び、召しの声をかけられました。突然の呼びかけであつたにもかかわらず、マタイは主の召しに応じ、従いました。彼はイエスの十二弟子の一人として働き、この福音書を書いて永遠にその名を覚えられる光栄にあずかったのです。

## 一、罪人を招くキリスト

イエスの在世当時の取税人とは、ローマ皇帝の下(実際は皇帝の下にある領主ヘロデ・アンティパスの下)で税金の取り立てをしていた人たちです。この仕事は、ユダヤ人社会にあつては最も憎まれ、軽蔑された職業でした。彼らはローマ帝国の権力をかさに着て、苦しむ同人から非情にも税を取り立てていたのです。しかも本来税として徴収するはずの数倍もの額を集めて私腹を肥やしていました。ですから、彼らは破廉恥な売国奴であり、冷酷な守銭奴であると映りました。それで取税人は遊女

や罪人と同類に扱われていたのです。

その取税人の一人であるマタイはその日、カペナウムの収税所にいつものように座っていました。ところがそこをお通りになったイエスがそのマタイを見て、「わたしに従ってきなさい」とお招きになったのです。マタイはそれまでにイエスのことを聞いて多少は知っていたと思いますが、これは全く予想外のことだったでしょう。イエスはユダヤ人から忌み嫌われ、罪人呼ばわりされているマタイを招かれたのです。

## 二、マタイの応答

このときまでに、シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネがイエスの弟子に召されていました(マルコ1・14〜20)。彼らもイエスの召しに対して、何かを捨てて従いました。マタイも同じように従ったのですが、しかし、マタイの決断のほうが、もっと厳しかったと言えます。シモンたちは、もし従えなくなったときには、いつでも元の漁師に戻ることができたでしょう。しかし、マタイの場合は、収税所の職を捨ててしまうと、もしものときに、再び戻することは不可能に近いことでした。

しかし、マタイは、イエスが「わたしに従ってきなさい

い」との主の召しを受けると、すぐ立ち上がって、従って行きました。そのことをルカは次のように記しています。「するとレビ（マタイの別名）は、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った」（5・28 新改訳）。このことをマタイは書いていません。それは何を捨てても誇りとはならないということです。つまり、社会的にも、宗教的にも人々から忌み嫌われ、捨てられた罪人の自分に対してさえ、主が与えられた分不相応の恵みについて、人々に知ってもらいたかったのです。

### 三、イエスの救い

イエスに従って新しいスタートを始めるにあたり、マタイはイエスのために食事の席を設け、「多くの取税人や罪人たち」を招きました。取税人や罪人を食事に招いた目的は、おそらく職場のお別れパーティーのためと、同僚にイエスを紹介するためであったのでしょう。

すると、これを見たパリサイ人たちは、弟子たちにつぶやきました。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」と。すると、イエスはこう言われました。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」、さらに、「わたしがきたのは、義

人を招くためではなく、罪人を招くためである」と。この場面で、医者が必要としている「病人」や、イエスに招かれている「罪人」とは、取税人や罪人たちです。また、医者はいらない「丈夫な人」、〈義人〉とは、パリサイ人たちでした。

では、この世に〈義人〉と〈罪人〉、「キリストの救いが必要とする人」と「キリストの救いを必要としない人」の二種類の人がいるとイエスが言われたのかというと、そうではありません。すべての人は罪人で救いを必要としています（ローマ3・23）。イエスは、パリサイ人のように自尊心に満ち、自分の罪を認めない人のために来られたのではなく、自分の罪を認め、救いを求めている取税人や罪人を救うために来られたということです。

### 結論

救いは律法や行いによるのではなく、神のあわれみによるのです。神は、すべての人たちを差別なく救いに招いておられます。救いを必要としている罪人であることを認め、キリストのもとに行くならだれでも救われるのです（ローマ3・22）。

## 研究資料

(中島啓二)

マタイの召命の記事は、救いが律法の行いによるのではなく、神のあわれみによるものであることをはっきり示している。神に招かれ、救われた者は、隣人をさばくのではなく、神の御心に従って隣人を愛することが求められているのである。

## テキスト

**9 マタイ** 本福音書の記者。マルコには「アルパヨの子レビ」(2・14)とあり、その名は彼が生粋きっすいのユダヤ人であることを推測させる。おそらく召命と回心を機にマタイ(「主の賜物」の意)と名乗るようになったのであろう。**収税所** カペナウムは国境にある通商の要地であった。マタイはそこに置かれていた税関で働いていたのであろう。取税人はユダヤの同胞から蔑視されていた。それは彼らが支配者(カペナウムの場合はローマ皇帝ではなくヘロデ・アンティパス)にへつらう者であり、また同胞から不法に搾取して私腹を肥やす者であったからである。また彼らが安息日を守らずに日々異邦人を相手に取引をし、異教国の通

貨を扱っていたことは、律法遵守という民族の標準からかけ離れていた。しかし職業柄としての几帳面さは、後に彼が福音書記者として活動する際に役立ったであろうことは想像に難くない。**わたしに従ってきなさい** イエスの権威ある言葉には、病を癒いやし(8・13)、罪をゆるし(9・2)、人を造り変える力がある。**すると彼は立ちあがって、イエスに従った** 百卒長の僕や中風の者の癒しの場合と同様に、取税人マタイも、イエスの権威ある言葉に対し、即座の服従をもって応答した。

**10 イエスが家で食事の席についておられた時** マタイは自分の家(ルカ5・29参照)に新しい師を招き、回心を記念して祝宴を催した。**多くの取税人** マタイはキリストの弟子として新しい人生を歩み始めた喜びを、同僚たちにも伝えようとした。**罪人たち** いわゆる犯罪者ではなく、律法の厳格な規定を守ることができない人たちの呼称。

**11 なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか** パリサイ人たちはイエスを激しく非難した。ユダヤ社会において誰かと食事の席を共にすることは、その人と自分を同種と見なすことであった。それゆえ異邦人や律法を守らない人たちと同席することは、自らの身を

汚すことと見なされたのである。

12 丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である  
「病人」とは取税人や罪人たちのことであり、「病」は、神の前における彼らの本来あるべきではない状態を指す。イエスは彼らを神との正常な関係へと戻すために、進んで彼らと交わりを持たれた。「丈夫な人」はパリサイ人たちを指すのであろうが、「…には医者はいらない」とは、決して、イエスによる救いが必要としない人が存在するということではない。むしろ、自分には医者はいらないと思っている彼らこそが、逆説的に見れば、最もイエスを必要とする人たちなのである。

13 わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない ホセア6・6の引用(12・7でイエスは再びここを引用する)。ここでの「いけにえ」は、律法の厳格な遵守を意味する。「あわれみ」(ホセア書では「ヘセド」)は非常に深遠な用語である。神の属性に関しては「恵み」、「真実」、「揺るぎない愛」などを、人間に用いる場合には「神に対する」忠誠心、「(隣人に対する)友愛」などを表す。神は、いけにえや律法の重要性さえもかすむほどに、愛とあわれみに大きな強調を置いておられるのである。イエスは

父なる神の御心をご自身の心として行動された。どういう意味か、学ん<sup>じやうど</sup>できなさい パリサイ人たちは、律法遵守こそが何よりも重要だという立場を堅持し、律法を守らない者たちを排斥していた。しかしイエスは、聖書を通して、神の御心は明らかにそうでないこと、愛とあわれみをもって罪人らを受け入れるべきであることを示した。「学ん<sup>じやうど</sup>できなさい」はパリサイ人たちも用いる、ユダヤ教師の常套句であつた。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである ここにイエスの来臨の目的がはっきりと示される。すなわち、罪のゆるしこそがイエスの宣教の中心なのである。「義人」とあるが、パリサイ人たちのそれは自称に過ぎない。先述の通り、救いが必要としない人はいないのであり、それゆえ、イエスに招かれていない人もいないのである。「いけにえ」(律法の遵守)によつて救いを獲得できる人は一人もいない。救いはただ神の「あわれみ」による罪のゆるしから来るのである。自分は『見える』と言ひ張る(ヨハネ9・41)パリサイ人たちにも救いが必要であり、彼らのことをもイエスは愛とあわれみをもって招いておられるのである。

参考図書 8月12日分と同じ

## 聖書

マタイ9・9～13

## タイトル

罪人を招く救い主

## 暗唱聖句

わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。

## 目標

救いを必要とする罪人であると認め、キリストのもとに行く。

マタイ9・13

## 導入

(水野晶子)

新聞や雑誌には求人広告といって、働いてもらうスタッフを募集する広告が出ています。「元氣なスタッフ大募集」「笑顔とファイト大歓迎」とか、「経験者・資格者優遇」など。今までにその仕事をしたことのある人や、特別な資格を持っている人は、良い条件で働くことができる特典をつけて、会社役に立つ人を募集するのです。

ではイエス様は、神様の大切なお仕事をする弟子として、どんな人を招かれたのでしょうか。

## イエス様が招かれた人

イエス様は漁師であつたシモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネを弟子として招かれました。彼らは頭が良くて、彼ら

に力があるから招いたわけではありません。彼らは無学なただの人でした。

さらにイエス様はカペナウムでマタイを招かれました。彼の仕事は、みんなから嫌われ憎まれていた税金取りでした。決まっている金額よりも何倍も余分に取立てて自分のために金儲けし、いつもユダヤ人を虐げている支配者にべこべこしているような人でした。ですから、みんなに罪人として軽蔑されていました。そんな罪人が神の国のために役に立つでしょうか？しかし、イエス様はマタイを見て、「わたしに従ってきなさい」と招かれました。マタイはすぐに立ち上がって従いました。彼はうれしくて、家に仕事の仲間や友人を招いてイエス様と一緒に食事をしました。しかしこれを見たパリサイ人たちは非常にショックを受け、イエス様を非難しました。パリサイ人にとってマタイの仲間はみんな罪人であり、罪人と一緒に食事をするイエス様も罪人とみなしたのです。

## イエス様の救い

律法をいつも守って、正しい生活をしていると自慢しているパリサイ人にとって、イエス様のしていることがわかりません。弟子たちに「あんたがたの先生は、どうしてあ

んな連中とつき合うんだい」(リビングバイブル)とつぶやきました。イエス様は「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。『わたしが好きなのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできない。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」と言われました。イエス様は罪人を赦し、救うために来られたのです。マタイやその仲間たちは、明らかに罪人だと言われ、その自覚もしていました。しかし実は、「自分たちは律法を堅く守っていて正しい」と自称していたパリサイ人も罪人なのです。イエス様の救いを必要としているのは、むしろ彼らなのです。イエス様は愛とあわれみをもってパリサイ人をも招いておられます。

罪人のマタイが招かれてイエス様の弟子になりました。その時まで「レビ」という名前でしたが「主の賜物」という意味の「マタイ」という名前に変わり、イエス様に従いました。

### 例話

ジョージ・ミューラーは、一生のうちに五つの孤児院をつくり、保護者のいない子どもたちを九九七五人も養った人です。彼は少年時代、手のつけられない不良でした。お父

さんは税金を集める仕事をしていましたが、度々そのお金がなくなるのです。誰が盗むのか調べると、ジョージがそれを盗んで靴の中に隠していました。見つかっては謝るのですが、また盗みを繰り返して、16歳になった時には、刑務所に入るような犯罪者になっていました。まじめに生活したいと思っても長続きしません。ところが21歳の冬、誘われた家庭集会で聖書の話聞き、ひざまずいて神様に祈る人の姿を生まれて初めて見たとき、今まで味わったことのない平安に包まれたのです。それから彼は、聖書を読み、よく祈り、集会に出席するようになりました。そして、イエス様が自分の罪を背負って十字架で死んでくださったことをはつきりと悟り、その救いを心から受け入れたのです。その時から彼は、わがままな罪深い生活を捨てて、新しい人として生きるように変えられたのです。(シヨートメッセージ100)より

### まとめとつぶ

私たちは神様の喜ばれないことをしてしまう罪人です。イエス様のもとに行き救っていただく。

♪「わたしさえも愛して」♪

(プレイズワールド 27番)

# 聖書 テーマ マタイ9・35〜38 収穫のための働き人

## 序論

(高橋頼男)

主イエスの初期ガリラヤ伝道の記録です。イエスはすべての町々村々を巡り、会堂で教え、御国の福音をのべ伝え、人々の病氣や患いを癒されました。多くの人々が集まり、妨げられることなく伝道が拡大していききました。

## 一、見る目 洞察する心 (36)

イエスは、ご自分のもとに続々とやってくる群衆をご覧になり、まるで〈飼う者のない羊〉のように、弱り果てて倒れていくのをご覧になり、彼らをか弱いそうに思われました。羊飼いのない羊は、放置された家畜です。世話する人がいなくなり、生きてはいませんがいつも空腹で、病んでおり、傷ついたままでひどく弱り果てています。そのままで放置すれば死に至るものもあるのです。〈こんなに…深くあわれまれました〉とは、はらわたが傷み、わななき、心の底から深く動かされる様子です。

今、日本の国は十年以上、三万人を超す自殺者を出しています。

す。無関心が蔓延し、毎日のように孤立死、孤独死のニュースを聞きます。東京の世帯人口は、一世帯あたり二人を切ってしまいました。一人住まいの人がどんどん増えているのです。短絡的な見解や、一例を取ってすべてを決めつけるようなことは避けなければなりません。しかし、私たちは、この時代と社会に対してどのような目を持つているでしょうか。社会や人々のうちに何を見ているでしょうか。主が私たちの時代や社会、そこにうごめく人々をご覧になるとき、何をどのように見られるでしょうか。私たちは、霊的な目、人々の内側にある真の渇きや必要を察知しているでしょうか。繰り返される悲惨な出来事に慣れてしまい、人の痛みや悲しみの現実が、普段の光景や現象としてしか見えていないのではないのでしょうか。そこには、何の痛みも、まして腹をえぐられるような嘆きや悲しみもないのです。収穫のための働き人の動機は、深いあわれみです。

## 二、収穫は多いが、働き人が少ない (37)

聖霊による力強い宣教、そこに伴う不思議や奇跡に引きつけられて、イエスの周りには、多くの人々が群れ集まっています。肉体を取られ、制限された御姿のイエスお一人で彼らを相手にするには大変でした。確かに、収穫は多いが働き手が少ないと言われるのはよくわかります。

しかし、今の時代、私たちの周囲にこのお言葉はどう適應されるべきでしょうか。私たちは、伝道のためにはあれもこれもと行事をこなし、特別コンサートには、新しい多くの人々を教会に迎えます。しかし、教会に留まる人、まして、福音に関心を示し求めてくる魂は本当に稀です。一人の魂に、どれだけの時間、祈り、犠牲、配慮が必要でしょうか。果たして、私たちの伝道に関して、「収穫は多い」と言えるだろうかと考えてしまいます。

かつて私たちの町で、日師を迎えて大々的なクルセードを行ったことがありました。熱心な伝道がなされたのですが、決心者が本当に少なかったのです。「この地は、燃えない地だ・・・」と日師が嘆かれたことを思い出します。

夜通し漁をして「何も取れませんでした」と嘆息している漁師に、イエスは「沖へこぎ出し、網をおろして漁を試みなさい」と命じられました。しぶしぶ、「お言葉ですから」と応じたペテロは手応えある網の中に、とても一人で引き上げることができないほどの大漁を見ました（ルカ5・1～11）。その朝、「何も取れません・・・」と言っていたガリラヤの湖には、たしかに多くの魚がいたのです。本気で祈り、み言葉に聴き従うとき、そこには想定外の展開が備えられているのかも知れません。収

穫のための働き人の確信は、収穫は多いという事実です。

### 三、収穫の主に祈れ (38)

主イエスは、課題は「働き人が少ない」ことだとされ、そのため収穫の主に祈れと言われました。弟子たちは祈りました。そして、祈るうちに、祈る自分たちが働き人として召されていく者となりました。主は、その後、徹夜の祈りの中で十二使徒を選び出され、彼らを派遣されました（10・1～5）。「使徒」とは遣わされた者の意味です。人が救われるためには、何としても福音が宣べ伝えられなければなりません。そのために、収穫の主に遣わされなくてはなりません（ローマ10・14～15）。「良いことの知らせを伝える人々の足（口ではなく足）は、何とりっぱでしょう」（15・新改訳）。口で熱心に祈ること、足を運んで訪ねることは別のことです。足を運ばなければ、しばしば忍耐をもつてしなければ届かない魂があります。収穫のための働き人は、収穫の主に祈ります。

### 結論

収穫が多いと言われる主のみ言葉を受け止めましょう。そして、収穫の主に願って収穫のための働き人を送っていただきましょう。また、自らも収穫のための良い働き人となりましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

この箇所では、山上の説教(5・1〜7・28)とそれに続く活動の記事(8・1〜9・34)のまとめが語られ、宣教の緊急性と働きの必要性が述べられている。イエスは教え、福音を宣べ伝え、癒しのわざを行われた。その活動の中心は神の国の宣言すなわち福音宣教である。そしてその働きは弟子たち、そして教会によって受け継がれ、担われていくのである。

## テキスト

35 イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。先に4・23でほぼ同じ内容のことが語られている。すなわち5〜9章の総括が、その前と後で二回なされているのである。言葉とわざにおける至上の権威を持つイエスは、教え、神の国の福音を宣べ伝え、癒しを行った。しかしこれらは同列に並ぶものではない。例えば11・1では「教えまた宣べ伝える」とあるのみで、癒しが言及されていない。このことは、癒しが二次的なものであることを示している。イエスの

活動の中心はあくまでも「御国の福音」であり、教えもわざも、その宣教のためにこそなされるのである。

36 飼う者のない羊のように 「わが羊は散らされている。彼らはもろもろの山と、もろもろの高き丘にさまよひ、わが羊は地の全面に散らされているが、これを捜す者もなく、尋ねる者もない」(エゼキエル34・6)が念頭に置かれた表現であろう。「主の会衆を牧者のない羊のようにしないでください」(民数記27・17)とあるように、旧約で羊飼いは、民を正しく導く指導者(王、祭司、預言者など)を指すたとえに用いられた。待ち望まれた救い主であるイエスこそが、すべての民を霊的に正しく導く羊飼いだである。弱り果てて、倒れているのをごらんになって 「弱り果てて」(ギ)エスキュルメノイは「皮をはがれて」、「倒れている」(ギ)エリメノイは、「地に打ちつけられている」の意で、霊的に混乱し、ひどく消耗している状態を表す。彼らを深くあわれまれた非常に深い同情を表す表現(14・14、15・32等)。イエスが民衆に同情された理由は、彼らが霊的に混乱し消耗しているという、目に見える「症状」のためだけではなく、その「症状」をもたらした根本原因にこそあった。

すなわち「飼う者」がいらないことである。イエスこそが「よい羊飼」（ヨハネ10・11）であるのに、彼らは自分たちをその窮状から導き出すお方が誰であるかを知らなかったか、あるいは自分たちがそのような窮状にあることにすら気づいていなかったのである。

**37 収穫は多いが** 「収穫」は聖書において「最後の審判」を表す比喩に用いられることが多い（13・39、イザヤ17・11等）。ここでの「収穫」は、審判そのものを指すのではないが、終末を見すえた緊急性を内包する用語である。24・14には「この御国の福音は、すべての民に對してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」とある。このことから、ここでの「収穫」は、終末をもたらし条件である宣教の働きの実りとして、悔い改めて神に立ち返る可能性のある人たちのことを指すと考えてもよいだろう。**働き人が少ない** その「福音が全世界に宣べ伝えられる」ためには、当然、働き人が必要である。直後の10章は、十二弟子がその使命のために遣わされる箇所である。イエスがそのために来られた神の国の福音の宣教の働きは、まずは十二人の弟子たちによって、さらには

それに続く働き人たちによって、受け継がれ、担われていなくてはならないのである。

**38 収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい** 「収穫の主」とあるように、

人の救いは、人のわざではなく神のわざである（Iコリント3・6以下参照）。また、この祈りは、福音宣教の働きを担う働き人を、神ご自身が起こしてくださることを示している（ピリピ2・13参照）。このように、救いも、献身も、神の側に主権があるわざであるが、人はそれに自由意志をもって応答しなくてはならない。さらに、救われた人は、他者の救いのために、また働き人が起こされるために祈らねばならないのである。この祈りへの勧告は、全ての時代の全ての教会に向けて語られてきた。そしてその勧告に応答した教会の祈りに対する神からの答えもまた、教会が今日まで存在してきたこと、そして教会の歴史がこれからも続いていくという事実の中に示されていると言える。主の来臨の日、御国が完成するその時まで、収穫は続いていく。ならばその日まで、働き人の必要がなくなることはないのである。

**参考図書** 8月12日分と同じ

## 聖書

マタイ9・35～38

## タイトル

働き人募集中!! (ラリー・デー)

収穫は多いが、働き人が少ない。

## 目標

福音を必要としている世を知り、働き人として神に自分を献げる。

マタイ9・37

## 導入

(松浦みち子)

さあ、夏休みが終わって、二学期を迎えました。今後、大学は9月入学に変わるかもしれません。皆さんが大きくなる頃には、♪さくら咲いたら一年生、ひとりで行けるかな♪という歌がなくなってしまうかもしれませんね。

教会では、9月第一聖日を振起日(ラリー・デー)と呼んで大切な日としてきました。それは、長い夏休みに区切りをつけ、心新たにスタートをきろう!というけじめの日だからです。あなたも大きく息を吸って深呼吸しましょう。背筋を伸ばして主を見上げて、レッツゴー!!

## イエス様のお働き

イエス様は、弟子たちと一緒にあちらこちらの町や村を巡り歩いて行かれました。イエス様の働きぶりはどんな様

子だったのでしょうか。

第一は、町々や村々の諸会堂で聖書を教えられました。イエス様の時代の聖書は旧約聖書、ただでしたから、その中で最も大切なことは何かをお教しえになりました。「主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」、次に「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マルコ12・29～31)と。

第二は、神の国の福音を語られました。神様はどんな方か、私たちはどう生きていったら神様に喜ばれるのかを、具体的な物事を通して語られました。迷子の羊のお話や、空の鳥、野の花、麦、ぶどう、服のツギあて、なくなった銀貨の話など、身近で、だれにもわかるものを用いて話をされるので、みんなはイエス様のお話が大好きでした。また、その内容は子どもにも大人にもよく分かりました。

第三は、人々の癒しです。集まってくる人々の中には、病気で苦しんでいる人も大勢いました。そんな人々の苦しみ、悩み、悲しみを知って、病気を癒したり、目や耳の不自由な人を治したり、また、娘が死んで悲しみにくれている役人の家を訪ねて生き返らせたり、それはそれは寝る暇

もないほど忙しく働かれました。

## 人々の様子

イエス様は、自分のもとにやって来る大勢の人々の様子をご覧になり、まるで飼う者のない羊のように弱り果て、倒れているのをとてもかわいそうに思われました。羊は迷いやすく、憶病で弱い動物なので、羊飼いがいないと迷子になったり、獣に襲われたりしてしまいます。人々は自分たちを正しく導いてくれる人がいないため弱り果てていたのです。国の指導者たちも人々が本当に必要としているものを理解していません。深い憐れみを感じられたのですが、イエス様おひとりでは働きに限界があったのです。

## 働き人募集のための祈り

そこでイエス様は、弟子たちに収穫の働き人を求めて「祈りなさい」と命じられました。「収穫は多いが、働き人が少ない」と言われた意味は、救いを求めている人は多いのに、その人たちにみ言葉を伝えたり、導いたりする働き人が足りないということです。「だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」と言われたのです。最初にイエス様の選ばれた弟子たちは、ごくごく普通の人でしたが、イエス様から力と

勇気を与えられて、神様のお役に立つ働き人になりました。あなたも「イエス様、わたしを用いて下さい」と自分をお献げするなら、主は働き人として用いて下さるのです。

## ミヤンマー医療宣教師

荒川泰子さんは、中学生のとき教会で海外宣教師のメッセージを聞きました。その話を聞いて、自分も宣教師になりたいと申し出ました。すると「医師の資格をとって宣教師になるといいよ」とアドバイスを受けました。そこで医学部で6年間勉強し、4年間の小児科専門医の研修を受けた後、神学校で学んでミヤンマーに遣わされました。「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」(エレミヤ33・3)、このみ言葉に導かれ、ミヤンマーで孤児院の子どもたちの健康管理や医療に励んだり、教会学校教師の研修を行ったりして、主の働き人として励んでおられます。イエス様は二千年間「働き人募集中!!」の看板を立て続けておられます。あなたも主の働き人として応募しませんか!?

♪もちいたまえわが主よ♪

(ホーリネス 113)

# 聖書 テーマ マタイ14・13～21 祝福される献げ物

## 序論

(高橋頼男)

パンの奇跡の記事は、四福音書がこぞって取り上げている奇跡です。この奇跡は、イエスのお働きの生涯における頂点を示すものでした。パンの奇跡、五千人の給食物語は全ての人に感動的で、だれにも無条件に喜びをもたらした出来事です。(みんなの者は食べて満腹した)とありますが、やはり、食べて満ち足りることの経験は、共通の記憶の中にいつまでも残るものなのでしょうか。

この奇跡の起こりは、五千人を超える飢えた群衆を前にして、あまりにも小さなもの、取るに足らないもの、パン五つと二ひきの魚が主の前に持ってこられ、主にささげられたことでした。

## 一、あなた方の手で(16)

弟子たちは、これほど多くの飢えた人々の食事を準備することは、とても自分たちの手には負えないと考えました。そこで、群衆を解散させ、彼らがそれぞれで食べ物を求めるよう提案しました。弟子たちの提案は、この状況においてはき

わめて常識的なものだと思われます。しかし、果たして一度にすべての者が首尾よく食べ物を手に入れることができるでしょうか。不安も残ります。弟子たちは、ともかくにもそれ以外に方法はないと判断しました。ここは、問題を自己責任として処理すること以外にないと思つたのです。

しかし、イエスのお考えは異なつていました。イエスは「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物をやりなさい」と言われたのです。

彼らが、自分たちの持つているものを探すと、パンが五つと、干し魚が二匹ありました。しかも、これは少年が持つていたお弁当だと言います。彼らは、思わず「それが何になりましょう」(ヨハネ6・9)と言いました。ここには、パン五つと魚二匹よりほか何もなく、自分たちの持てる物は、全く無に等しいことを認めざるを得ませんでした。多くの飢えた群衆を前にして、弟子たちは、何と小さく、無力であつたことでしょうか。

## 二、それを、ここに持つてきなさい(18)

弟子たちが途方に暮れているとき、主は「それをここに持つてきなさい」と言われました。自分たちの持つているものを、いきなり人に与えるのではなくて、まず、それを主のもとに

持つていくことを言われ、それを主にささげることが命じられました。その時、主はその小さな貧しいものを受けとり、御手に握つて祝福されました。そして、祝福が加えられたものを、再び弟子たちの手に委ねてくださったのです。弟子たちはそれを群衆に配りました。その時、人々は、食べて満腹し満足し、残りのパンくずを集めると十二のかこが一杯になりました。

この行為とその過程は、私たちの奉仕において、きわめて大切なことです。私たちの小ささ、無力に、主の祝福とその全能が臨む時、私たちは、主にあつてどんなことでもできるのです。ひとりの少女が言いました。「小さなわたしだけでは、何も出来ません。しかし、わたしの手の中にある6ペンスと、そこに神の御手が加えられるなら、何でもできるのです！」パウロもまた言います。「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができ」(ピリピ4・13)。

### 三、祝福されるささげもの

小さなもの、とるに足らないものをも、それを主におささげするとき、主はそれをきよめ、祝福して人々のために主のお働きのために用いてくださいます。しかし、この小さなささげもの、「五つのパンと二ひきの魚」は、どんなに小さく

ても少年の持つているすべてであり、弟子たちがかき集めたすべてであつたのです。

主が「誰よりも多くささげた」と言われた2レプタは、宮にささげることの許された最小限のささげものでしたが、やもめの手に最後まで握られていた生活費のすべてでした(ルカ21・1〜4)。祝福されるささげものは、適当なもの、余裕を残してのささげもの、まして余りものであるはずがありません。主が喜んで受け入れられるささげものは、いかに小さくても、貧しくても、私のすべてであり、私のベストであるはずなのです。

私たちのささげもの、私たちの奉仕に対して、主は「それが、あなたのベストですか？」とやさしく問いかけられます。

「あなたは…恥じるところのない練達した働き人になって、神に自分をささげるように努めなさい」(Ⅱテモテ2・15)。

### 結論

私たちは、自分が働き人としてまことに小さな者、貧しく卑しい者であることを自覚させられます。しかし、そのようなものを喜んで受け取り、きよめ祝福して、御手の中で豊かに用いて下さる主に信頼し、『マイベスト』をおささげしていきましよう。

## 研究資料

(宮澤清志)

四つの福音書に共通して登場する記事は、受難と復活の記事を除いてはこのパンの奇跡だけである（並行記事は、マルコ6・30〜44、ルカ9・10〜17、ヨハネ6・1〜14）。言うまでもないことであるが、受難と復活の記事はイエスの出来事のクライマックスである。では、なぜこの記事がすべての福音書に描かれているのだろうか。それはまず、この奇跡が弟子たちにとって非常に大きな出来事であったということである。それまでは個人的な癒しの奇跡であったものが、このような大群衆を前にしての、しかも大群衆のための奇跡へと発展してきたのである。そして次には、この奇跡の持つ霊的な意味の重要性の故である。ヨハネによる福音書では、この奇跡の後に「わたしが命のパンである」（ヨハネ6・35）と語られた。このパンの奇跡は、古来より様々な解釈がなされている（詳細は省略）が、「いのちのパン」であるイエスによって文字通りに行われたものである。

## テキスト

このテキストは、大別すると二つに分けられる。13〜14節の「イエスのあわれみといやしの記事」と、15節以降の「パ

ンの供給」の記事である。

**13 このこと** この箇所直前に描かれているバプテスマのヨハネの殺害に関する記事のこと。バプテスマのヨハネの死は、イエスにとっては衝撃的な出来事であったであろう。注解者の中には、このヨハネの死をイエスの死の伏線ととらえる者もいる。**舟に乗って** イエスが向かった先は、ガリラヤ湖の向こう岸（ヨハネ6・1）であり、その目的は寂しい所へ行かれるためであった。

**14 あわれんで** マルコの並行記事では、この言葉の前に「飼う者のない羊のようなその有様を」（マルコ6・34）とあり、イエスがこの群衆をどのようにご覧になっているかをよく示す言葉として注目される（マタイ9・36）。**おいやしになった** マルコ6・34ではこの箇所は「教えはじめられた」となっている。民衆に対するあわれみはイエスのいやしへとつながる。

**15 夕方になった** 夕食ときになつてしまった、という意味が込められている。**群衆を解散させ、村々へ行かせてください** この言葉は、弟子たちの現状認識としては極めて常識的な判断だったであろう。しかし、ある注解者は、弟子たちがカナの婚礼の奇跡（ヨハネ2・1〜11）の出来事を心にと

めていたならば、このような言葉を出すことはなく、イエスに期待したであろうと述べている。そうでなくても、弟子たちがこの直前にイエスの手を通してなされたいやしのわざを覚えていたなら、やはりこのような言葉は出なかったであろうと考えられる。いずれにしても、常識にとらわれていた弟子たちには、目の前の主のわざが見えなくなっていたのであろう。

**16 あなたがたの手で** 前節の弟子たちの言葉に対して、イエスには他の考えがあった。それは、弟子たちがこの群集を養うことであった。

**17 わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていない** この弟子たちの言葉は、やはり前節のように現実しか見えない弟子たちの言葉である。「しか」という言葉にそれがよく表れている。わたしたちは持つていないのである。

しかしこの言葉は同時に、次節の弟子たちの行為によってイエスの御業を引き出すという意味で、なくてはならないものだったともいえる。**パン五つと魚二ひき** ヨハネの並行記事を見ると、おそらくこれは少年のお弁当だったのではないかと推測できる(ヨハネ6・9)。このパンと魚は、当時の人々のごく普通の食物といわれており、特にパン(ヨハネ6・9

では「大麦のパン」は当時の貧しい人々の食物であった。

**18 それをここに持つてきなさい** たとえ「五つのパンと二ひきの魚でしかない」と思ったとしても、主はそれを用いて御業をなされる。主は、いかなる献げものであったとしても、神の国の御業のためには弟子たちが持つてきたものを喜んでお用いになるのである。

**19 マルコの並行記事にみられる詳細**(マルコ6・37、38) はここでは省略され、かわって弟子たちが直接手渡した姿が強調されている。弟子たちにとっては、イエスの素晴らしい御業に直接関与できる、これ以上ない素晴らしい機会であったであろう。

**20 満腹した** 直訳は「満足した」。**十二のかご** 十二弟子を指す数字であるとも、イスラエルの十二部族を指す数字であるとも考えられている。

**21 女と子供とを除いて** 当時のユダヤ社会では、納税と徴兵の義務を負っていた成人男性のみを人数として数えていた。マタイはそのような会衆に対して福音書を書いたので、このような表現となっている。女性と子どもを加えた実際の人数は、一万人とも二万人とも言われている。

**参考図書** 9月16日分と同じ

## 聖書

マタイ14・13～21

## タイトル

余り物には福がある！

パンくずの残りを集めると、十二のか

ごにいつぱいになった。マタイ14・20

## 目標

所有する物、また自分自身を、神に献げる。

## 導入

(松浦みち子)

♪ ポケットの中にはビスケットがひとつ、ポケットをたたくとビスケットはふたつ、…そーんなふしぎなポケットがほしい♪ ふしぎなポケットの歌を知っていますか？ ポケットをたたくたびにビスケットが増えるなんて、なんと素敵なポケットでしょう。

## 寂しい心

イエス様は大勢の人から離れて寂しいところに行かれました。なぜなら、ヘロデ王がイエス様の命をねらっている事を知られたからです。しかし、群集はイエス様を慕ってどこまでも、どこまでも追いかけてきます。イエス様は、自分の身の危険など考えないで、病氣の人を癒したり、人々を助けられました。

その日も夕方近くなっても誰一人帰ろうとせず、弟子が思い余ってイエス様に提案しました。「イエス様、ここは寂しい所でもあり、もう時も遅くなりました。群集を解散させてめいめい食物を買いに村々に行かせてください」と。するとイエス様は「あなたがたの手で食物をやりなさい」と言われました。「えっ!? イエス様、何て無茶なことを。五千人以上もいるのですよ。何百万円分のパンを買ったとしても足りません。しかも、人里はなれた寂しい所です」。弟子たちはイエス様の言葉に途方にくれるばかりです。ひとりの男の子がパン五つと魚二ひきの弁当を持っていて、「これ、よかつたらどうぞ」と差し出してくれました。しかし、こんな大勢の人では何の役にもたちません。ああ…、どうすればよいのでしょうか。

## 五つのパンと二ひきの魚

ところが、イエス様は男の子が差し出した五つのパンと二ひきの魚のことを聞かれて、「それをここに持つてきなさい」とおっしゃいました。そして群集に命じて、草の上に座らせ、五つのパンと二ひきの魚とを手にとり、天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡されました。すると…、あら不思議！パンはさいてもさいてもなくなり

ません。魚も同様です。弟子たちは人々に「さあ、好きなだけ食べなさい」と言いながら、パンを配りました。人々は驚きながら、大喜びでパンを食べました。みんなは充分食べて、もうお腹一杯です。弟子たちが残りのパンくずの残りを集めると12のかごにいっぱいになりました。

これはいったいどういうことでしょう。弟子たちは、五つのパンと二ひきの魚を見たとき、こんなちっぽけなものでは何の役にも立たないと思いました。しかし、イエス様はこれを見たとき神様の力を信じ、無から有を生み出される全能のお方に祈られました。神様には不可能がないことを知っておられたからです。「人にはできない事も、神にできる」(ルカ18・27)。私たちが不可能なことにぶつかるとき、それは神様の全能の力を知る絶好のチャンスです。

百歳を越えても精神的に活躍しておられる日野原重明というお医者さんがいらっしやいます。「いつまでも自分には挑戦することをあきらめない」と言われ、神様が自分を生かしていただくことを感謝して、チャレンジし続けておられるのです。

残りのパンくずから学ぶこと

「余り物には福がある」ということがあります。私

私たちは、この残りのパンくずから何を学びとることができるでしょうか。

第一は 神様の祝福は豊かなものだ、ということですよ。けちけちしたものでなく、余りあるほど豊かなものだということですよ。89歳で召天したわたしの母（泉かよ）の口癖はこうでした。「私たちが献げるものはスコップいっぱいほどのものであっても、神様はダンプルーパーいっぱいに報いて下さる」。だから、喜んで主のために献げましょう。たとえ小さなものであっても、主は祝し、神の国のお働きのために用いて下さるのです。

第二は、持つていく所を明確に、ということですよ。パンも魚も弟子たちの手にある間は、五つと二ひきのままでした。しかし、イエス様の所を持つて行つたとき奇跡が起りました。難しい問題も自分で抱え込んでいては、いくら知恵を絞つても解決されません。イエス様の所を持つて行くのです。「思い煩ひは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていく。ださるからです」(Ⅰペテロ5・7 新共同訳)。

♪主イエスとともに♪

(ふくいん子どもさんびか 90)

90

# 聖書 テーマ マタイ14・22～33 逆風の中でキリストを見る

序論

(高橋頼男)

パンの奇跡に興奮した群衆が、熱狂的になってご自分を王位につけようとするのを知られた主は、群衆と弟子たちを切り離すために、すぐ弟子たちを強いて船に乗せて向こう岸へと出発させ、その間に群衆を解散させ帰してしまわれました。そして、主は祈るためにひとり山に登られたのです。

## 一、逆風に漕ぎ悩み恐れる弟子たち(24～27)

イエスに強いて船に乗り込ませられ出発した弟子たちでしたが、沖で向かい風(逆風)に悩まされてなかなか進むことができません。夜中の三時ごろになって暗闇が最も増すとき、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに近づかれました。弟子たちはイエスが湖の上を歩いて来られるのを見て「幽霊だ!」と言って恐れ、叫び声を上げました。ここには、逆風を恐れ、暗闇を恐れ、湖を歩かれるイエスを幽霊と見間違えて恐れる弟子たちの姿があります。彼らのところは、信仰ではなく恐れで満ちています。

私たちの心も、しばしば恐れに捕えられてしまうことがな

いでしょうか。主イエスに従って船に乗り込み出帆したのですが、なかなか前に進むことができずに暗闇の中で漕ぎ悩んでしまうようなことが・・・しかも、船の中にイエスはおられないのです。逆風は真正面から、未来から吹いてくる風です。将来のことを考えてこれからどうなっていくのだろうと、何となく不安と恐れに捕われることがあるかもしれせん。

しかし、主イエスに従っているなら、その行く手に出会う逆風も、暗闇も恐れることはありません。主イエスは、天上で私たちのために祈り、とりなしておられるのです。そして、最も闇の深い時、思いもよらぬ方法で私たちのところに近づいてくださるのです。そして、船に乗り込んでくださり、風を治めてくださいます。困難と恐れは、驚くべき神の救いが現れる機会となるのです。主は弟子たちをしいて湖に送り出され、試みに会わせられました。これは主の訓練であつたと思われまふ。同じように、主はわたしたちも訓練されます。

## 二、おぼれたペテロ(28～30)

湖を歩いて近づいて来られるのがイエスであることを認めたペテロは、早くみそばに行きたいばかりに、大胆なことを願ひ求めました。(主よ、あなたでしたか。では、わたしに

命じて、水の上を渡つてみもとに行かせてください」。すると、主はペテロの求めに対して「おいでなさい」と言われたのです。ペテロは舟から一步、湖の上に踏み出し、何と、主の方に歩きだしたのです。大胆に願い求め、主のお答え（み言葉）を聞き、信頼して一步踏み出す世界はまさしく信仰の世界です。ところが、ペテロが風の音を聞いてふと風を見た瞬間、たちまち恐れが彼の心に入りました。そしてその恐れは彼の心をたちまち支配したのです。その結果、ペテロはもはや水の上を歩くことはできず沈み始めました。彼は大声で「主よ、助けてください！」と叫びました。私たちも、主から目を離す時、信仰の世界から不信仰の世界へ、主への信頼の世界から、自分を取りまく現実の世界へと急転してしまうことがあります。

### 三、逆風の中でキリストを見る

ペテロはなぜ沈んだのでしょうか。ペテロはイエスの御顔を見、〈おいでなさい〉と言われたみ言葉を聞いて一步を踏みだした時、湖の上を歩きました。しかし、風の音を聞いてイエスから目を離し、他のものに目を向けた瞬間、恐れが彼の心と意思を支配して主に対する信頼を失ってしまったのです。ペテロの目と耳が主の御顔とみ言葉から離れて他のもの

を見、他の声を聞いた時、それは彼が水を踏む信仰と歩みを失った瞬間でした。

イエスの御顔とみ言葉にひたすら聴き、信頼して従うなら、主がおゆるしになる歩みが導かれます。しかし、イエスから目を離し、他のものを見、他の声に聞くなら、信仰を失い、その歩みも失ってしまうのです。むしろ、困難が襲った時、苦しみや悲しみが押し寄せる時こそ、その困難な波から目を離し、悲しみの中からイエスを仰ぎましょう。

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」（ヘブル12・2 新改訳）。私たちがいつも心がけるべきことは、イエスから目を離さないこと、いつでもどんな場合でも、どんな中からでも、イエスを仰ぎ見る信仰です。さらに、「わたしは絶えず主に相對しています」（詩篇16・8 新共同訳）と、いつもイエスの前に生き、イエスとの交わりの中に歩み、その御声を聞き、その御顔をまっすぐに仰ぎ見る生活をするのが大切です。生きたイエスとの関係を築き上げましょう。

### 結論

イエスから、目を離さないでいなさい。いつでも、どこからでも、主イエスを仰ぎ見なさい。

## 研究資料

(宮澤清志)

先週語られた「五千人の給食」の物語と今週取り上げられる箇所は、現代のキリスト者にとってはいわゆる「つまずきの石」であり、合理的に説明のしようのない物語である。それゆえ古来より、様々な解釈が試みられてきた。それらについて触れることはここでは紙面の関係上控えるが、マタイはここで、イエスが自然法則の支配者であることを明らかにしようとしている。モーセは荒野でイスラエルの民にマナを与え、また紅海を静めた。モーセにまさったお方であるイエスも同様にパンの奇跡をなさり、また嵐を静められた。なおこの箇所の並行記事としては、マルコ6・45〜52、ヨハネ6・16〜21がある。

## テキスト

**22 それからすぐ** 前節までのいわゆる「五千人の給食」の奇跡の後、並行記事のマルコもヨハネも、この二つの記事はセットで登場しており、この二つの物語を相補的に理解しなければならぬことになる。しいてイエスの強い意志が表された非常に強い言葉である。弟子たちには、自らの行動を選択する決定権はない。

**23 祈るためにひそかに山へ登られた** 福音書においては、イエスの宣教活動における重要な出来事の前や後には、(山に登って)祈ることがしばしば言及される。

**24 数丁** 直訳は「多くのスタディオイ」(1スタディオンは約200m)。マルコによれば、この時舟は「湖のまん中」(マルコ6・47)にあった。**逆風** ガリラヤ湖特有の突風。

**25 夜明けの四時ごろ** 新改訳では「夜中の三時ごろ」となっている。直訳では「第四の夜回り」となる。当時のローマ人は、午後6時から午前6時までの間を四等分して時間帯として用いていた。つまり第4の区分である午前3時から6時までの間を指す。**彼らの方へ行かれた** イエスは弟子たちを見捨てられることは決してない。山での祈りを終えられると、イエスは弟子たちの方へと歩を進められるのである。あるいはイエスは困難に直面した弟子たちを助けるのに最も良い時を知っておられたのであろう。

**26 幽霊** この言葉は当時のユダヤ人たちには至極一般的なものであった。この言葉はいかなる幻影にも用いられていた。**おじ怪しい、恐怖のあまり叫び声をあげた** 「おじ怪しい」「恐怖」「叫び声」といった同種の言葉が繰り返されており、弟子たちの驚きがどれほど大きかったかをよく表している。な

お、イエスの現れに対して弟子たちがイエスを見分けることができなかったのは、エマオでの顕現（ルカ24・13～）、テベリヤ湖での顕現（ヨハネ21・4）においても見られる。

**27 わたしである**（ギ）エゴ・エイミ） 直訳は「わたしこそ」。神の自己啓示の言葉であって、ご自身を旧約聖書のヤーウエと同一視された言葉である（出エジプト3・14、イザヤ書43・10）。このイエスこそ生ける神であって、風と波との支配者であるとの宣言の言葉である。恐れることはない 直訳は「恐れることをやめなさい」となる。

**28** この箇所から後の言葉は、並行記事であるマルコやヨハネにはない。マタイ独特の箇所である。主よ、あなたでしか新改訳聖書では「主よ、もしあなたでしたら…」と疑問形で訳している。しかし、この呼びかけは、前節の「わたしである」に対応しての「あなたなのですから」（直訳）という全能の神、自然の支配者への呼びかけの意図が込められていると考えられる。

**29 おいでなさい** イエスの答えはこの一言のみである。しかし、主の弟子にとつてはこの一言だけで充分であった。

**30 風を見て** それまでのペテロは、ただイエスのみを見ていたということの裏返しとしての言葉。

**主よ、お助けください** 天の御国の民にとつては最も大切な言葉である。

**31 信仰の薄い者** イエスはここで「信仰がない」とはおっしゃらなかった。「信仰が薄い」のであって、「信仰が少ない」「信仰が足りない」という意味である。信仰とは、主と主の言葉に信頼することであり、ここではイエスの「おいでなさい」という言葉のみを頼りにして、主から目をそらさずに歩むことであった。信じつつも信じきれない弱い弟子の姿がここに表れている。疑った ギリシャ語の原意は「二つに分かれる」である。一方では信じつつも、他方では嵐に氣をとられて心が二つに分かれてしまうことである。

**33** マルコにはこの弟子たちの告白は省略されている。弟子たちは同様の経験をすでに8・23く27においてしていた。しかし、五千人の給食の奇跡とこの出来事によって、彼らの告白はイエスを「神の子」として礼拝するまでに至った。まさにこの箇所の中心は、イエスが誰であるかということを示しているのである。

**参考図書** D・R・A・ヘア『マタイによる福音書（現代聖書注解）』、デイヴィッド・ヒル『マタイによる福音書（ニューセンチュリー聖書注解）』（いずれも日本基督教団出版局）

## 83

と言うと、「きなさい」と言われるではありませんか。ペテロは舟から下り、水の上を歩いてイエスの所に行きました。しかし、一瞬風を見て、恐ろしくなり、溺れかけ「主よ、助けてください」と叫びました。すぐに、イエス様は手を伸ばして彼を助け、「信仰の薄い者よ、なぜ、疑ったのか」と不信仰をたしなめられました。ペテロとイエス様が舟に乗り込むと、たちまち風はやんでしまいました。

### イエス様を仰ぎ見る

舟の中からこの様子を見ていた弟子たちは、イエス様を拝して「ほんとうに、あなたは神の子です」と信仰告白をしました。

イエス様は、これらの出来事を通して、弟子たちを訓練なさったのです。パンの奇跡を見て、イエス様のなさったことを体験したにもかかわらず、イエス様が神であること、イエス様にとって不可能なことはひとつもないということを、まだ悟ることができませんでした。このような弟子たちを訓練するため、嵐の湖にあえて送り出し、ご自身はひとり、山でとりなしの祈りをしてくださいました。何という深い愛のご配慮でしょう。弟

子たちは、命の危険にさらされながら、自分の無力さに気づき、イエス様を心から信じる者に変えられたのです。今、悩みの中にいるお友達がいますか？あなたは何をしてもうまくいかないあと同じき詰まりを感じていますか？でも、大丈夫です。「しつかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と、一人ひとりに御声をかけてくださるイエス様を信じ、仰ぎ見ましょう。

また、どんな事でも「主よ、助けてください」と祈るとき、主は折にかなう助けを与えて下さるお方です。

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル4・15〜16）。

イエス様から目をそらさないで、歩んでいきましょうね。

♪た、だひとり野原を♪

（救いの聖歌 15）

# 聖書 ヨシユア1・1～9

## テーマ 戦いへの備え

序論

(高橋頼男)

偉大な神の人、モーセがついに死にました。モーセに比べうる者は他に誰もいません。出エジプト以来、今日に至るまでのイスラエルの歴史と歩みは、モーセという偉大な指導者なしにはありえなかったことです。しかも、今まさに約束の地へ侵入しようとしている大事な時でした。このような時、モーセの死は決定的な影響を与える出来事でした。

### 一、モーセの死は、新しい前進の始まり

(2～4)

モーセを失ってこれからどうしたらよいのか。一大民族となったこの民を誰が担い、持ち運び、正しく導くことができるでしょう。ヨシユアをはじめ民は皆、不安になりました。しかし、モーセの死は、神のご計画のうちにありました。そして、モーセを通して約束したが、モーセが生きている間はできなかったことを、神は今、後継者を立てて成し遂げようとしておられるのです。そこには、神がすでに準備しておられるご計画があり、神はそれを熱心に果たそうとしておられ

たのです。そのため神が選り備えておられたのが、モーセの従者、ヌンの子ヨシユアでした。

神は、ヨシユアに命じました。(今あなたとこのすべての民とは、共に立つて、このヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい。あなたがたが、足の裏で踏み所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう。)と。神のご計画しておられる聖業<sup>みわざ</sup>には、遅れや中途半端、挫折はありません(ピリピ1・12)。  
また、神のご計画は必ず速やかに進められなければなりません。

### 二、雄々しく、強くあれ(6～7、9)

主は、ヨシユアを繰り返し励まされました。指導者として大切なことは、固く立つて動かされず、強くかつ勇敢であることです。しかし、現実にはどんな人でも恐れがあり、おのきがあります。ヨシユアも例外ではありませんでした。

「彼は神と人からの、ありとあらゆる励ましと鼓舞を必要としていた。『強くあれ』とは、彼が弱さを感じていたことを意味する。『雄々しくあれ』とは、彼がおびえていたことを意味する。『おのいてはならない』とは、途中で仕事を放棄してしまうのではないかと彼が本気で考えていたことを

意味する。彼は虫であつて、人ではない」(F B マイヤー「ヨシユアの生涯」)。ヨシユアに与えられた任務は、民を導いて約束の地に入り、その地を戦い取つて嗣業の地として民に分け与えることでした。自分にそのような能力があるのか、勇氣と覚悟をもつて最後までそれをやりぬくことができるのか不安でした。しかし、神はすでにヨシユアに召しと賜物を与えておられました。「わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共にあるであらう」と。彼が信賴して従う限り、神ご自身の力強い臨在を約束されたのです。

私たちの闘いは、この世にある信仰の闘いであり靈的闘いです。人々にキリストを証し福音を宣べ伝え、人々の魂をキリストに勝ち取ることです。個人でも教会でも私たちが行つて戦い取るべき、あなたが〈足の裏で踏む〉べき多くの嗣業の地があります。そこには多くの困難や問題、激しい靈的戦いがあります。しかし、ヨシユアを励ましてくださった主は、私たちをも励まし、共にいて勝利を与えてくださるのです。恐れおののくことなく、主に信賴して前進しましょう。

「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇氣を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ16・33)。

「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28・20)。

### 三、全ての律法を守り行え(7〜8)

神はヨシユアを励まされただけでなく、ヨシユアと民が律法の全てを守り行うこと、右にも曲がらず左にもそれず、主の律法に従つてまっすぐ進むことを命じました。明確な指針、決断のための確かな基準、力は、真理である神にあります。

そのために、律法が絶えず語られること、律法を昼も夜も思い巡らすこと、律法を状況のなかで実践することが強調されました。み言葉を語り、黙想し、適用して実践することです。〈そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであらう〉と神は約束されました。

今の時代、私たちがみ言葉を守り行うことは決してやさしいことではありません。み言葉を行うことには勇氣が必要です。しかし、そこにこそ神の祝福があることを信じましょう。

### 結論

すべてのことが、かえつて御業の前進となることを信じ、恐れず勇氣を持ち、神のご臨在とみ言葉に信賴して私たちの戦いを立派に戦いぬきましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

この文章は、申命記の最後とヨシユア記とを結ぶものであり、それまでの中心人物であった「主のしもべモーセ」から後継者ヨシユアへとバトンタッチされていく箇所として、非常に重要な意味をもつ。この箇所は主がヨシユアに語られた言葉が中心であるが、その内容は、ヨシユアに対する神の「明確な使命」、「明確な命令」、「明確な約束」である。

## テキスト

1 この節は、申命記とヨシユア記とをつなぐ役割をもつ節である。あるいはヨシユア記全体の緒論としての意味も併せ持つ箇所でもある。**モーセの従者、ヌンの子ヨシユア** このヨシユアは出エジプトの最初からしばしばモーセとともに登場し、特に重要な局面では「モーセの従者」としての役割を發揮していた(出エジプト17・8〜9、24・13、33・11、民数記11・24〜29等)。このようにヨシユアは40年にわたる荒野での生活の中で訓練され、時いたつてモーセの後継者として神ご自身によって立てられたのである。ヨシユアという名は、ギリシャ語で「イエス」となり、

「主は救い」という意味を持つ名である。

2〜3 この箇所には、5・12までにみられるヨルダン川渡河と、5・13〜12・24までに記されているいわゆる「征服」の箇所についてのあらましとが記述されている。

2 わたしのしもべモーセは死んだ この詳細は申命記34章を参照。現実を見、それを把握することは、主の民にとつて避けて通ることのできないことである。同時にこのことは、ヨシユアがその指導性を發揮できるようになるための神の愛と配慮に満ちた語りかけでもある。**与える** 2節の「与える」は分詞であり、この言葉の背後には、神がその民に課そうとしている働きの意図が含まれている。すなわち、約束の地は、神からの恵みの賜物として描かれる。しかし、この恵みの賜物をいただくためには人間の側で「ヨルダンを渡る」ことと、「足の裏で踏む」という二つの条件が示される。神は土地を約束された。しかし、それはタナボタ的に与えられるという約束ではない。民は与えられた土地を獲得するために戦わなければならないかったのである。一方、3節の「与える」は完了形であり、神のご摂理の中では、領土はヨシユアの手に渡してしまっているのである。天においてはすでにこの行為は完了してしまつて

いるのである。あとは地上においてヨシユアの手によってそれを完成させるのである。

4 この記述は、並行記事として申命記11・24～25にみられる。特にこの節の理解に関しては、教会などに聖書地図がある場合はそれらを開きながら読むことをお勧めする。

**荒野** ある限定した「荒野」(シナイの荒野のような)という意味ではなく、ヨルダン川西岸とその南側の地域の一般的名称。**レバノン** パレスチナ北部にそびえるシリヤの山脈地帯。**ヘテ人の全地** 申命記11・24にはこの記述はない。ヘテとはヒッタイト人のこと。**大海** 地中海のこと。

6 **強く、また雄々しくあれ** この節のほかにも1・7、

9、18にも繰り返し登場する言葉であり、ヨシユアを持つ責任を強調する言葉である。またヨシユアは申命記31・6、23にも同様の言葉をかけられている(31・6はモーセを通して)。また同様の言葉はダビデがその子ソロモンに(歴代上28・20)、またヒゼキヤがその民に対して(歴代下32・7)語っている。いずれも神の臨在と支えの言葉とが対になって語られている。ヨシユアはイスラエルの民を約束の地へと導くために、強く、雄々しくあらねばならない。しかし、それは単なるカラ元気、カラ勇気の類ではなく、神

が共にいてくださるが故の勇気である(5、9)。

7～9 この節では、ヨシユアがイスラエルの民を約束の地へと導くための秘訣が示される。この節を通して、ヨシユアがモーセの律法への従順を欠いてはこれのこをなせないことを示しているのである。ヨシユアが神の律法への黙想と服従とを第一としない限り、彼の指導は失敗に終わるであろうことを示唆している。

7 **モーセがあなたがたに命じた律法をことごとく守って行い**… 申命記5・31～32、27・1、28・14等に登場する、申命記的律法の大きなテーマである。

8 ヨシユアは律法への従順を欠いてはこれらのことはなすことはできない。ヨシユアが神の律法への黙想と服従とを第一のこととしない限り、彼の指導は失敗に終わることになる(ヨシユア23・6、詩篇1・1～3)。

9 **主が共におられる** 主がモーセに語られた言葉と同じ言葉であり、信仰者にとつてはこの言葉によって支えられ、また勇気づけられる言葉である(出エジプト3・12、イザヤ43・2～5、マタイ1・23他)。

**参考図書** リチャード・S・ヘス『デインデル聖書注解 ヨシユア記』(いのちのことば社) 他

## 聖書

ヨシユア1:1-9

## タイトル

新しいリーダー誕生

## 暗唱聖句

強く、また雄々しくあれ。

ヨシユア1:6

## 目標

信仰の戦いのために、み言葉による備えをする。

## 導入

(松浦みち子)

北朝鮮では、リーダーの死に伴い、息子の金正恩氏キムジョンウンが新リーダーとなったことが話題になりましたね。かつて、イスラエル人はエジプトで奴隷でしたが、指導者モーセに率いられ、エジプトを脱出し、神の約束の地カナンを目指して旅を続けました。ところが、カナンの地の目の前でモーセは120歳の生涯を閉じたのです。だが、モーセの後を受け継ぐのでしょうか。イスラエル人は神の約束の地に入ることができるのでしょうか？

## モーセの後継者ヨシユア

イスラエルの指導者モーセは晩年、次にバトンを渡す人物について、神ご自身から「この人に任せよ！」と命じられていました。「神の霊のやどっているヌンの子ヨ

シユアを選び、あなたの手をその上におき」なさい(民数記27・18)、と。

ヨシユアは、若い時からモーセに従ってきた人物でした。こんなことがありました。ある時モーセに命じられて、仲間と一緒にカナンの地を偵察に行ったのです。すると仲間の多くは「モーセさん、無理です。私たちには手に負えません。エジプトに引き返しましょう」と報告しました。なぜなら、その地の人々の体格は大きく、町も石の城壁でがっちり囲まれていたのです。ちよつとやそつとでは太刀打ちできません。ところが、ヨシユアは「神様に信頼して戦えば必ず勝てる！」と断言しました。このように、ヨシユアは若い日から神様を信頼する人でした。

## ヨシユアへのチャレンジ

モーセは、イスラエル人をエジプトから連れ出すために立てられたリーダーでした。一方、ヨシユアは、イスラエル人を神の約束の地カナンに定住させるために立てられたリーダーです。ヨシユアは若い時から、モーセのそばで指導者のあり方を見て学んできました。しかし、いざ自分がリーダーになってみると、「モーセさんのよ

うに、立派なリーダーになれるのだろうか。みんなはわたしの言うことを聞いてくれるだろうか」と、不安が心をよぎったことでしょう。そんなヨシユアに神様はチャレンジされました。

命令①「ヨシユアとイスラエルの民は共に、ヨルダン川を渡って主が与えようとしている地に行きなさい」。

約束①「あなたが足の裏で踏む所はみな与える。モーセと共にいたように、ヨシユア、わたしはあなたと共にいる」。

命令②「強く、雄々しくあれ。モーセが命じた律法をすべて守り行い、右にも左にも曲がってはならない」。

約束②「そうするなら、あなたは栄え、勝利を得る」。

「強く、雄々しくあれ」、この命令が三度も繰り返されました。恐れや不安に押しつぶされそうになっているヨシユアを、主が励ましておられることがよくわかりますね。フィギアスケートの選手たちがスケートの前に指導者から励ましを受けて「大丈夫、さあ行きなさい!」と送り出される光景を見たことがありますか。神様は、そのように、不安で一杯のヨシユアの背中を押して下さっているのですね。「わたしが共にいるから大丈夫、強く、

雄々しくあれ!」と。

### ヨシユアの注意すべきこと

神様からのチャレンジを受け、リーダーとして立てられたヨシユアには、最も心すべきことがありました。何でしょう。それは使命を果たすために、注意して主の律法、み言葉を守り行うことでした。これは、その人の努力や勇気よりも更に重要なことです。

偉大な指導者モーセでしたが、イスラエル人が荒野で言い争った時、神様からこう命じられました。「杖を取れ。会衆を集めよ、彼らの目の前で岩に命じれば岩は水を出す。あなたは彼らのために岩から水を出し、会衆と家畜に飲ませよ」。しかし、民の不従順とつぶやきの声にカッとなってしまいました。売り言葉に買い言葉で叫びながら、手にした杖で二度も岩を打ったのです。モーセは「命じなさい」という神の言葉にそむき、岩を二度も打ったことにより、「カナンの地に導き入れることはできない」と言う主の厳しい言葉を聞くことになったのです。なんと厳粛な出来事でしょう。神のみ言葉に忠実な者となりましょう。

♪雄々しくあれ、強くあれ♪

(新聖歌 486)

# 聖書 ヨシユア3・1～17

## テーマ 約束の地に入る

序論

(高橋頼男)

神の命令によつて、いよいよ約束の地に入ろうとするヨシユアとイスラエルの民ですが、その前にはヨルダン川が立ちふさがつていました。約束の地に入るには、どうしてもヨルダン川を越えなければなりません。ヨシユア3章は、ヨルダン渡河の驚くべき記録です。〈生ける神があなたがたのうちにおいでになり、あなたがたの前から、カナンびと、エブスびとを、必ず追い払われることを、次のことによつて、あなたがたは知るであろう〉と云われているように、この大いなる不思議を伴うヨルダン渡河は、それに続く約束の地「カナン」に侵入するための試金石でした。

### 一、不思議を行われる神(1～13)

シットムからヨルダンにまで来た民は、そこで三日間留まりました。この間、ヨシユアは何をしていたのでしょうか。満水の雪解け水をたたえて勢いを増して流れるヨルダン川を眼前に、どのようにしてこれを渡るか、思案していました。一行の中には、女子ども、老人、そして、たくさんのお家畜がいました。これらを伴つ

て、ヨルダン川を渡るのは、並大抵のことではありません。どうしたらよいかわからず、ただ、神のお言葉を待つばかりませんでした。その時、神はヨシユアに語られたのです。〈あなたは契約の箱をかく祭司たちに命じて言わなければならない、『あなたがたは、ヨルダンの水ぎわへ行くと、すぐ、ヨルダンの中に立ちどまらなければならない』と。神の箱をかく祭司たちの足の裏が、ヨルダンの水の中に踏みとどまる時、ヨルダンの水は流れをせき止められ、上から流れくだる水はとどまつて、うず高くなると言われたのです。神のみ言葉を聞いたヨシユアは、民に〈あす、主があなたがたのうちに不思議を行われる〉と言いました。「不思議」とは、驚くべき事柄、神のなされる奇跡のことです。かつてエジプトにおいて、主がモーセを通してなされた数々の奇跡(出エジプト3・20)を思い起こさせました。

私たちが仕えている主は、生ける力ある神であつて、昔も今も不思議を行われるお方です。

### 二、全き信頼と服従(14～17)

神の不思議は、み言葉への全き信頼と服従があつてこそなされます。祭司がヨルダン川の水の直前まで来ても、奇跡は起こりません。箱をかつぐ祭司たちの足が一步踏み出し、実際に水の中に浸るその瞬間、不思議は起こったのです。

「箱をかく者がヨルダンにきて、箱をかく祭司たちの足が水ぎわにひたると同時に、…上から流れくだる水はとどまつて、…全くせきとめられた」。

奇跡が起きてから川を渡るのではなく、信仰の行いが先に必要なのです。川の水がいまだ兩岸に満ちている時、足を水に踏み入れることは難しいことです。しかし、信仰とはまさにそのことなのです。聞いたみ言葉に信頼して従うことです。大切なのは、現実がどうであるかということではなく、み言葉がどう語られているか、ということです。神は状況を造り出し、支配し、またその状況を変えることができるお方です。

「信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは死んだものです」、「彼の信仰は彼の行いとともに働いた」（ヤコブ2・17、22 新改訳）。

### 三、神を恐れ自らを清くする（3～5）

民は、自分たちの先を行く主の契約の箱に従っていくこと、その箱との間にはおよそ二千キュビト（九百メートル）の距離をおかなければならないことを命じられました。また、神のご臨在を表す聖なる契約の箱に、近づいてはならないことをも命じられました。聖なるもの、聖なるお方を畏れるべきことが教えられたのです。

さらに、〈あなた方は身を清めなさい。あす、主があなたがたのうちに不思議を行われるからである〉と、神の驚くべきお働きを目の当たりに経験する民は、清くあるべきことを命じられました。このきよめは、外面的、実際的には身をきよめ、衣服を洗い、女性から身を慎むことを指したようですが、内面的には、真に神を恐れ、不信仰や高慢を取り去り、主の前に徹底してへりくだり、全き信頼を主にささげることです。聖なる神のくすしい御業にあずかるためには、民は、自分自身のあらゆる汚れや不遜から自分をきよめ、聖別されるべきことが命じられているのです。

このようにして、ヨシユアと民はヨルダンを渡りました。神が先立ち、驚くべき不思議をもって道を開いてくださったのです。神の約束の地を獲得していくことは真に困難な戦いですが、必ず神が先立つてくださり、道を開いて下さることを信じることできました。

### 結論

神が命じられる道には必ず困難があります。しかし、不思議を行われる神を信頼し、自らをきよめ、大胆な服従をもって前進しましょう。そして、神の約束されている嗣業の地を獲得していきましよう。

## 研究資料

(宮澤清志)

本章とそれに続く第4章とは、イスラエルのヨルダン渡河の準備から完了に至るまでの物語である。特に本章では渡河の準備と(1〜13)、川における奇跡の報告(14〜17)とで構成される。

この物語は、本文中では「不思議」(5)と呼ばれている。確かに、この物語を合理的に説明しようと試みる立場の主張はこの出来事を山崩れの結果とする。それも可能性としては考えうることであろう。しかし、この出来事が起こったタイミングについては説明することはできない。それは、この出来事の背後に主の御手が働き、出エジプトと同じ「不思議」が起こったということである。

## テキスト

**3 箱** 詳細は出エジプト25・10〜22にある。箱は最も重要な祭具で、聖所全体の中心ともいえるものである。この箱は神の臨在のしるしとみられた。**レビびとである祭司たち** レビ人は、古代イスラエルにおいて特に神に近く仕えたとされた集団である(民数記3・12、8・16等)。本節のように、神の契約の箱をかつぐのは、レビ人の務めとされていた(ヨシユア8・33)。

**4 二千キュビト** 約900メートル。1キュビトは約45センチメートル。イスラエルの民が聖なるものに近づきすぎることは危険であると信じられていたのである(サムエル下6・1〜11)。

**5 身を清めなさい** きよめるとは(ハ)カーダシユ・切り離す、という意)、自分自身をこの世のあらゆるものから切り離して神のものとする、という意味をもっている。具体的には着物を洗うことと、性的関係を慎むことなどが含まれていたと考えられる(出エジプト19・10〜25)。しかし、何よりもまず、自らの身をもつて神を信頼するという行為が求められていた。**不思議** 奇跡のこと。それによつて主がその力を示される、不思議な、あるいは恐るべき出来事を指している。なお、新共同訳では「驚くべきこと」と訳している。

**6 前節に「あす」とあることから、前節の翌日のことであろう。**ヨルダン渡河はここから始まる。

**7〜8** 先週見たヨシユアへの主の語りかけ(1・1〜9)に続く主の語りかけである。神の臨在の約束(7)とヨシユアへの指示(8)という内容は、1・1〜9にも見られたものである。不思議(5)すなわち奇跡の意図は、神がモーセといたように、ヨシユアとともにいることをすべてのイスラエルの前に知らせること(7)であった。この点においても、モーセとヨ

シユアとの類似性を見ることができ。

10 神は、約束にしたがってカナンの地をイスラエルに渡される。10節には、その原住民のリストが描かれている。このリストは、創世記15・19～21、出エジプト3・8、17、23・23、33・2、34・11、申命記20・17他にも登場する。カナンびと 旧約聖書においてはしばしばイスラエルによる征服前のパレスチナの住民の総称として用いられた（創世記12・5～6）。ヘテびと ヒッタイト帝国の残存民の一部（1・4参照）。ヒビびと カナン中央のシケム、ギブオン周辺をその主な居住地としていた。彼らはヨシユアを欺いて和を講じ、滅ぼされることを免れた唯一の民族である。ペリジ人 カナンびとと並んでしばしばカナン先住民の代表としてあげられていた。ギルガシびと アモリびと パレスチナ中央部の先住民の名。エブスびと 山地にすんでおり、ダビデ時代にはエルサレムの町を支配していた民族である。ちなみに「エブス」とはエルサレムの別称である。生ける神 原語には定冠詞がついており、周囲の民の神々のように死んだ神とは区別することを意図して用いられた言葉であらう。

11 全地の主 神はこの地上のすべてを支配される神である。

神はヨルダンの川をも支配される神であるということを言外に語っている。

12 詳細は4・2以下を参照。

13 本節において神の「不思議」が明らかとなる。

14～17 13節で語られた主の「不思議」が具体的な出来事として展開される。この箇所を中心はイスラエルの民ではなく、「祭司たち」である。

14 祭司たちは契約の箱をかき、民に先立って行った 主の戦いにおいては、いつも主が先立たれる。この奇跡においては、主の臨在の象徴である契約の箱が先立って進む。

15 ヨルダンは刈入れの間中、岸一面にあふれるのであるが刈入れの時期とは4月初旬のことであって、この時期はヘルモン山からの雪解け水でヨルダン川は岸まであふれていた。またヨルダン川の流れは非常に激しかった。

16 アダム ヨルダン渓谷にあるエリコの北およそ30キロメートルにあるテル・エド・ダミエと同定されている。アラバの海 すなわち塩の海 死海のこと。

17 こうして、出エジプトと同じ出来事が起こったのである（出エジプト14・21～22、29）。

参考図書 9月23日分と同じ

## 聖書

ヨシユア3・1〜17

## タイトル

さあ、ヨルダン川を渡ろう

## 暗唱聖句

ついに民はヨルダンを渡り終った。

ヨシユア3・17

## 目標

神が約束し、導かれたところに、信仰  
によって進み入る。

## 導入

(松浦みち子)

新しいリーダー、ヨシユアはその後どうなったのでしょうか。神様からの励ましをいただいたヨシユアは、すぐに命令どおりヨルダン川を渡る準備をしました。イスラエルの人々も、神様がヨシユアを新しいリーダーとして選んで下さったことを信じ、「ヨシユアさん、私たちは、あなたがおっしゃることは何でも行います。どこにでも行きます。モーセに従ったようにあなたに従います」と答えました。人々に信頼されて、ヨシユアはどんなに心強かったことでしょう。

## ヨルダン川を渡る

ヨシユアを先頭にイスラエル人はヨルダン川の岸まで進み、三日間そこに留まりました。目の前のヨルダン川は、

丁度雨期の冬が終わった時期だったので、水かさが増し、あふれるほどの勢いでゴーゴーと音を立て、渦をまきながら流れていました。川には橋がありません。イスラエル人の中には子どもや老人もいます。しかし、川向こうには神様が下さるすばらしい約束の地があるのです。なんとしても渡って行かねばならないのです。さあ、君たちだったらどうするでしょうか？（生徒に考えて答えてもらいましょう）。

イスラエル人たちは、三日間、渦巻く川の流れを見ながら、自分たちの力ではどうすることもできない、神様が助けてくださらなければとうてい向こう岸に渡れないと、だれもが心から思いました。ヨシユアは三日たってから神様のお言葉をみんなに伝えました。「神様が明日、すばらしいことをしてくださいます。祭司たちが神のお言葉が入っている契約の箱をかついでいるのを見たなら、あなたがたはその後について進みなさい。ただし、契約の箱には二千キュビト（九百メートル）の距離を置いて、それ以上近づいてはなりません。そして、身を清めて神のなされる不思議を待ちなさい」。人々は、ヨシユアの言うとおりに出発の準備をして待ちました。翌日、初めて主は川を渡る方法を示して下さいました。それと共にイスラエル人にヨシユ

9月

30日

礼拝メッセージ例

アが新リーダーであること、主が共におられることを知らせてくださいました。人々はヨシユアに従っていくことを決心しました。

### 一歩を踏み出す

いよいよ契約の箱をかついだ祭司たちが前に進み始めました。ヨシユアは祭司たちに「契約の箱を担ぎ、みんなの先頭に立って川に入りなさい。そしてヨルダン川の中に踏みとどまりなさい」と命じました。祭司たちは命令どおりにゴーゴーと逆巻くヨルダン川に向かってグングン突き進んでいきます。人々は息をこらして見守っています。祭司たちが川の水に足を踏み入れたとたん、「あつ！」と驚くような不思議なことが起こったのです。もうみんなはびつくりして声も出ません。さつきまで流れていた川の流れがピタツと止まって川の流れがせき止められたのです。川上の方ではせき止められた水がうず高く立ち上がり、川の中に乾いた道ができたのです。「わあー、やったあー!!」、歓声を上げながら大人も子どもも家畜も、何にも心配しないで向こう岸に渡ることができました。契約の箱を担いで川の真ん中に立っていた祭司たちが川から上がってくると、川の水は何事もなかったかのようにゴーゴーと音を立て、

流れ始めました。神様は約束どおり不思議なことをして下さったのですね。なんとすばらしいことでしょう。

### 名古屋教会、会堂取得物語

昔も今も変わらない神様の御業をあかししましょう。名古屋教会は開拓以来40年もの長い間借家の教会でしたが、40年目の二〇〇九年11月30日に真向かいの製菓工場の社屋を購入しました。9月に売り出しの旗がひらめき、2週間後には購入することを決断しました。「ヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい」(ヨシユア1・2)のみ言葉が与えられたのです。手持ちのお金は750万円しかありません。物件の売値は五千万円、到底手の届く額ではありません。信徒も20数名の小さな教会です。しかし、信仰の一步を踏み出したとき、40日間で献金と無利子の融資で金額が満たされ、約束の日に全額を支払うことができました。未信者の売主が「人にはできないが神にはできる」とのみ言葉を口走り、まさに神業だ!と驚いていました。地域の人々も神様の力に驚いています。信仰の一步を踏み出す時、神様はその不思議な力を現してくださるのですね。ハレルヤ!

♪ 威光・尊厳・栄誉 ♪

(新聖歌 166)

# キリストの恵みに応えて

マタイ 21・3

## ●キリストの教え②

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月1日	み言葉が実を結ぶために	マタイ 13・18 1・23 9	同上 8

## ●旧約⑥「モーセ」

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月8日	危機の中での信仰	出エジプト 2・1 10	同上 12
15日	臨在の主による派遣	出エジプト 3・1 12	同上 12
22日	過ぎ越しの恵み	出エジプト 12・1 14	同上 13

## ●キリストのみわざ

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
8月5日	危機の中での救い	出エジプト 14・10 14・29	同上 13
29日	信仰による前進	民数記 13・25 14・10	同上 14・9

行事

聖書

暗唱聖句

8月12日	模範的信仰	マタイ 8・5 13	同上 8
19日	罪を赦すお方	マタイ 9・1 8	同上 2
26日	罪人を招く救い主	マタイ 9・9 13	同上 13

9月2日	ラリデーの収穫のため働き人	マタイ 9・35 38	同上 37
9日	祝福される献げ物	マタイ 14・13 21	同上 20
16日	逆風の中でキリストを見る	マタイ 14・22 33	同上 27

## ●旧約⑦「ヨシヤと士師たち」

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
9月23日	戦いへの備え	ヨシヤ 1・1 9	同上 6
30日	約束の地に入る	ヨシヤ 3・1 17	同上 17

## — お わ り に —

『牧羊者』二〇一二年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。今回の教師養成講座は、宮澤清志師に「みことばが語りかける説教」（前半）を書いていただきました。また、今号は14週分ありますので、「牧羊ひろば」は、お休みします。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

## 『牧羊者』のご購読・ご利用について

\*分級用に、ワークA（幼稚園向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円（税込）でお送りします。

教会学校局ホームページ

<http://cs.jccj.info/>

\*「夏期教案2012」もホームページから無料でダウンロードできます。送付は630円（税込）です。

\*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務所）まで。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19

電話 (078) 575-5511

Fax (078) 575-6611

聖書講解 研究資料	金井信生師	高橋頼男師	福井文彦師
メッセージ例	中島啓一師	宮澤清志師	金井由嗣師
ワーク(A)	小平徳行師	飯田勝彦師	和田 治師
(B)	松浦みち子師	吉田美穂師	小菅央子師
(C)	野勢かほる師	竹崎光則師	鎌野 幸師
中高科へのヒント	田中裕明師	田代美雪師	上森恭子師
子ども聖書日課	石田高保師	後藤健一師	小野淳子師
フラッシュカード	田中愛子師	青木みぎわ姉	松浦あん姉
イラスト	丹羽 遥姉	丹羽 遥姉	楠 淳子師
ワープロ打ち込み	長田栄一師	加藤 清師	山中愛子師
校 正	長尾秀紀師	長尾明美師	山田和幸師

また、発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（長尾秀紀）

## 聖書教育教案誌 牧 羊 者

### 二〇一二年度Ⅱ巻

二〇一二年度Ⅱ巻

発行所 日本イエス・キリスト教団  
企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三―五五―一九  
電話 (078) 575-5511

印刷所 菱三印刷株式会社  
電話 (078) 575-6611

\*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み